

SEIJU

2016年
第46卷

冬期

成
寿



沙路
三喜登



横江善
三
印



火焰光背に朱を帯びた身代不動明王



■特集

善光寺二世中興

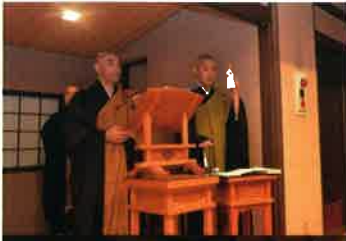
大圓武志大和尚

十三回忌法要

善光寺二世中興大圓武志大和尚の十三回忌法要が平成二十八年十月二十九日午後三時から、釈迦殿で営まれ、関係のご寺院、総代をはじめ檀信徒、さらに生前ご縁の深かった方々が海外からも駆けつけ、約百五十人の僧俗が参列、焼香しました。

導師の東香山大乗寺山主・東隆眞老師は、永平寺七十六世秦慧玉禪師の詩偈を改作して「兄と慕い弟と呼び年を知らず、共に両祖の正法禪を頂く。何のこと吾に先んじて遷化し去る、無量の感慨言詮を絶す」と法語を唱え、善光寺を興し留学僧育英会を發起して多くの檀信徒に慕われた大圓大和尚一代の偉業を追慕しました。

大圓武志大和尚と駒澤大学で共に学んだ学友である東老師は、「老大和尚は宗門の大羅漢」「超人の力量、抜群の志気」と故人の徳望と生前の活躍を讃え、二人を「青山と白雲」の関係だったと偲びました。



この後、参列者は小高い丘陵の上に立つ
供養塔の前に移動し、正翁寺ご住職・箕素
明老師（横浜市）の導師により墓前回向を
営み、読経・焼香しました。



カラ	―	■二世中興大圓武志大和尚十三回忌	1
法	話	●見える命 見えないいのち	14
連	載	●『普勸坐禅儀』に学ぶ その十	28
法	話	●いのちをおさめる 平成二十八年「秋彼岸会法話」	36
	●	おびんずるさま	50
カラ	―	■おびんずるさま、清水寺参拝旅行、道標建立	53
アーカイブ	■	おもいやりの心 ― 禅仏教の展望と真の教育	64
	●	第二十九回 育英会辞令交付式	76
転	載	●育英会は善光寺の使命であり、理念	78
	●	ニュースアラカルト	86
	●	善光寺霊園ニュース	100
お知らせ	●	毎月の催事	108
	●	普門寺アイゼンブッフ禅センターからのお便り	116
育英生からのお便り	125	育英会寄付	126
		読者のたより	128
		編集後記	142
		題字・イラスト	伊藤三喜庵
		中川 正壽	

巻頭言

善光寺住職 黒田博志

『宗祖を通して釈尊に還る』

師父はこの理念の基に善光寺を興し、活動し発信をし続けました。

本年、師父遷化後十二年の歳月を経て、十三回忌の年を迎えました。

師父の遺された善光寺の理念を想う時、その崇高さとそれを実践し続けてきた師父の強さを感じます。その実践の賜物である善光寺檀信徒皆様とのご縁。本年も数多くの方々より師父との思い出を伺いました。

檀信徒から信頼を頂いてこそその住職。

十月二十九日、大乘寺山主東隆眞老師に導師をお務め頂き、六十名を越すご寺院様方、七十名を越す各関係の皆様と共に十三回忌法要を厳修することが出来ました。歴

住墓には正翁寺御住職篁素明老師を導師に詣塔諷經をお務め頂き、皆様長い階段を登ってお参りして下さいました。ありがとございました。

秋彼岸法会に併せては成願寺御住職山口晴通老師に導師をお務め頂き、六百名を越す檀信徒の皆様と共に十三回忌予修法要を厳修致しました。多くの檀信徒に喜ばれ、改めて皆様の印象に残る住職であったのだなあと感じ入りました。師父遷化後に新しく縁を結ばせて頂いた皆様に対して私自身どれだけの影響、安心を与えることが出来ているのか。我が身を鑑み身の引き締まる思いを致しております。

多くの皆様のおかげで本年の一大行持を無事に修することが出来ました。心より感謝申し上げます。

この十三回忌法要にむけて山内の整備も致しました。昨年の「くろだ文庫」に続き、境内の敷地に「成寿堂」を建築し師父が檀信徒や有縁の方々よりご寄進頂いた絵画や掛軸などを收藏致しました。駐車場の整備や道標建立など師父への報恩としての山内整備。

初夏、京都清水寺参拝。平成十三年に清水寺境内に建立された顕彰碑を師父の写真

を胸に檀信徒の皆様と共にお参りできた事はこの上ない幸せでありました。森清範猊下には御多用中にも関わらずお時間を頂き、ご法話を賜りました。

又、猊下には善光寺に登る参道に建立した道標にご揮毫も賜りました。この道標は昨年逝去された鳥居秀行総代が発願していたものをご子息の悟様がお父様の遺志を相承しご寄進頂いたものです。

そして本号巻頭の新たに朱を帯びた善光寺の守り本尊身代り不動明王。師父はこのお不動様に護られ導かれて不動の心で歩まれました。とても力強く、パワーを頂ぎます。大きなお力で我々をお護りお導き下さいます。私もこのお不動様に導かれて師父の理念を継承して参る所存です。

世代や時空を超えて、多くの方々の思いが寺に寄せられております。その思いを受け止められるよう、師父のように皆様から信頼される住職になりたいと切に思います。

修証義第五章には『行持報恩』のお言葉。仏縁を頂き自らの仏心に目覚め、仏としての行いを持続していく事こそ仏の恩に報いていく道、幸せへの道であります。釈尊に還る道。その道の地図を明らかにし、道標を建ててお示し下さる宗祖や祖師方。そ

して先達として私をいつも励まして下さる師父。その師父の誓願、

「仏道を通して世界の安心・平和・幸福に寄与する人材を育てる」

その実践行として発足した横浜善光寺留学僧育英会も明年、設立二十周年を迎えます。これも偏に、師父の誓願を支えて下さった檀信徒皆様のおかげ、各方面・各関係者の皆様のおかげです。重ね重ね心よりの御礼を申し上げます。

私はこれからも、善光寺の理念を頭上に戴き敬いつつ、日々学びそして実践し、この幸せへの道を檀信徒の皆様と共に歩んでいくよう精進して参ります。

明年も益々のご指導ご鞭撻を賜りますよう伏してお願い申し上げます。

■特集

平成二十八年十月二十九日

当山二世中興

大圓武志大和尚十三回忌

善光寺二世中興大圓武志大和尚の十三回忌法要が平成二十八年十月二十九日午後三時から、釈迦殿で営まれました。

法要後の客殿でのお齋の席で、

黒田博志住職は「師匠が亡くなって早いもので十二年。無事十三回忌を迎えることができました。皆様のおかげとしみじみ感じています。思えば生前中はほとんど師匠の言葉、行いを素直に受け入れることが出来ませんでした。今は反省の日々です。先代は優しい父であり厳しい師匠でした。真面目にやれよ、とよく言われました。これからの日々は真面目に、素直に、皆





様方の指導を受けて精進したい」と謝辞を述べました。

大乘寺の東老師は「黒田老師は三つの理念を生涯の目標とし、実践された。第一は『宗祖を通して釈尊に還る』とおっしゃった。こんなことを言った人は道元禪師、瑩山禪師以外に誰もいない。これを現実社会にいかにも実践するかというので昭和五十九年に海外留学僧育英会を創設された。私はその最初のメンバーです。善光寺の育英生は各国各界各方面で活躍しております。

もう一つは京都の清水寺境内に瑩山禪師顕彰碑を建てたこと。私の勧めに応じて倫子夫人と二人で建てられた。最後に平成十三年、道元禪師七百五十回忌に際し奈良康明先生（駒澤大学元総長・名誉教授、永平寺西堂）と私の名前で『道元の二十一世紀』という本を出していただいた」と具体的な事績を挙げて大圓武志大和尚

の遺徳を讃えました。

熊谷豊太郎筆頭総代による御礼の後、詣塔諷經の導師をお務め頂いた正翁寺篁素明老師による献杯。隣寺でもあり法要の後席で一緒になる事も多く黒田老師との盃を酌み交した事を懐かしくお話し下さいました。中でも黒田老師は心配りの人で周りに酒を勧めることがとても上手で困ったとの話には、会場から老師を思い出しているの笑いも起こりました。法語もそれに因んだ言葉を選ばれたとの事。お越し頂いた皆様に黒田老師が呵々と笑いながら話しかけているような和やかな雰囲気のお斎の席でした。





檀信徒六百名と共に

十三回忌予修法要

平成二十八年九月二十日

導師 成願寺住職 山口晴通老師

孟蘭盆施食会の際に、十月に行う先代様の十三回忌法要について報告をしたところ檀信徒の方々より「先代様には大変お世話になりました。私達も出来たらいいから先代様にご焼香させてもらいたいなあ」との声を多くお寄せ頂きました。

ありがたい言葉に秋彼岸に併せて、檀信徒皆様と共に先代様の「十三回忌予修法要」を厳修致しました。成願寺山口晴通老師に導師をお務め頂き、午前、午後合わせて六百名を越す方々と一緒に法要を営みました。

常に檀信徒の皆様と共に在った先代様を偲ぶ一座となりました。

見える命 見えないのち

京都音羽山清水寺貫主 森 清範

おはようございます。ようこそ、早朝からのお詣りありがとうございます。今日、皆さま方がお越しいただくということを前から伺っておりまして指折り数えて待つておりました。そうしたら、朝からこんないい天気になりました。そ先代さんもさぞお喜びになられていることと思います。十二年になられるんですね。あつという間でございます。

ただ今お詣りになられました瑩山禪師さまの碑でございますが、あの碑は先代さまと奥さまと一緒に建てたもので、そして開眼除幕式の時には總持寺の板橋禪師さまもお詣りいた

いております。そんな事が昨日のように思い出されて、黒田和尚様のあのお元気なお姿を彷彿とおるところでございます。あれから一度、横浜善光寺さまにお詣りをさせていただきました。友人に曹洞宗の和尚がおりまして、一緒にお詣りに行こうということでした。ただききました。そのような事もありご縁が深うございます。

清水寺のお観音さまは瑩山禪師様と深いご縁がございます。禪師さまのお母さまは懐観さまという方ですが、この方が大變観音さまを信仰



されてお詣りをなさったところ、生き別れとなっていたお母様、瑩山禅師のおばあさまと再会されるという、そういう深い縁がございます。観音様といいますと、わたしどもの観音さまは三十三年に一度の御開帳となります。ですので、三十三年間ずっと扉が閉まっています。あと十七年ほど経たないと三十三年にはならないのです。そのときには全国津々浦々から大勢の方々が観音様にお詣りなさいます。

私どもの清水寺は今から千二百年前に創建をされました。奈良時代の末、平安時代の少し前の頃です。その頃に観音様ができたのですが、平安時代に入りますと、もう『京都に行ったら清水に行こう』と云われていたそうです。「桜が咲いた、清水さんに行こう、紅葉の時も行こう、新緑の時も京都に行こう」と。皆さまもそうでございます。修学旅行で来られた人もおりましょう。清水寺と言いましたら舞台があ

って、そこから見る光景が実に美しい。観音様の浄土かと思うほどでございます。私は毎朝、本堂に五時に入るのでありますが、今朝もいいお天気で、まるで観音様の浄土だなと思いつながら、お詣りをさせていただきました。このように昔から大勢の方がお詣りされております。

さて、清水寺は源氏物語にも出ております。清少納言さんの『枕草子』にも何か所もでております。第六十六代的一条天皇の中宮彰子さまの女官が紫式部、皇后定子さまの女官が清少納言です。この二人の女官が、御所の中で相對していたんですね。紫式部が清少納言の事をこう言ったそうです。

「清少納言こそしたり顔にいみじうはべりける人……よく見れば、まだいと足らぬこと多かり」と。

「清少納言は得意な顔をしてはるけどまだま

だ未熟だ」と。

女性はいつの時代も強いものでございます。

この清少納言さんが清水寺に何度も来てくれていました。

皆さんもようご存知の『枕草子』一段目、

「春は曙（あけぼの）。やうやう白くなりゆく山際（やまぎは）、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」

ここから始まり、

「清水などに参りて、坂もとのぼるほどに、柴たく香の、いみじうあはれなるこそをかしけれ」

これは今、ちようど皆さまが上がってきた門前町です。柴を焚いている煙がなんともいい香がして、風流だなと言っているのです。

他にも幾つもあります。清少納言は方々のお寺にお説教を聞きにいつているんです。昔は皆さんよくお寺に行ったものです。相談事も歌

も踊りももちろん御詠歌もお寺にいつて和尚さんにやってもらっていたんですな。今でいったら文化センターみたいなものですね。

です、清少納言さんはあちこちのお寺に行つてお説教を聞いておられます。その中で説教の講師はどんな人が良いかと書いておられるんですね。

「説経の講師は顔よき。講師の顔を、つとまもらへたるこそ、その説くことの尊さも覚ゆれ。ひが目しつれば、ふと忘るるに、にくげなるは罪や得らむと覚ゆ。このことは、とどむべし。少し齡（とし）などのよろしきほどは、かやうの罪得がたのことは、かき出でけめ。今は罪いと恐ろし」

説教の和尚はまず顔が良く、男前がいつて書いてあるんです。今で言つたら、イケメン

がいいつて言っているんです。男前だったらじつと見るので内容もその尊さもよく分かると思つてあります。男前でない和尚の話聞いてみるとよそ見（ひが目）をすると書いてあります。こんなこと書いて仏罪が恐ろしい。私も先は長くないので、男前や男前でないなどと言つて罰が当たつてはかなわないので書かないでおこうと言いながら書いてあるんです。

この方は面白い方でございますね。

ここに座つておりますと、学校の先生が教壇に立つているようなものでね、ちょっと長い話をぐずぐずすると、「もう和尚さん早くやめなはれ。次の予定があるのに」とすぐに顔に出るんですね。もうしばらくでございますから、我慢しておいてください。

今、言いましたようにここは三十三年に一度の御開帳があります。御開帳というのは、閉ま

っている扉を開けます。すると中にいらつしやる観音さまのお姿が見えるということです。それは一つのセレモニーなんです。

わたしたちの心の中にも仏さんがおられます。そしてこの心の中に貪瞋痴をはじめとする一〇八の煩惱があるわけです。一〇八の煩惱が扉なんです。この煩惱を取って、扉を開いたら仏さんが見えるわけです。

皆さんは仏さんですよ、言つたつて、『なんでこんな欲深いわたしが仏さんなんや?』と思うでしょう。心の中にいっぱい煩惱が巣づくっているんです。それを取ろうということですが、これは取れないんです。人間から煩惱を取ったら人間でなくなるんです。人間だから仏さんを拜むことができるんです。今晚帰つたらそつと自分の心を開いてみてください。あんまり良いもん入つてないはずですよ。

あいつ腹立つ、あいつ憎たらし、あいつはど

ないかなつたらいい、とこんな調子です。あれ欲しい、これ欲しい、ああなりたいたい、こうなりたいたい、心の中に渦が巻いておりますね。皆さんいかがです? 私も、一つぐらいブランド品欲しいと思つておりませんか? ブランド品を日本語に訳してみてください。あれは二流品ではなく、一流品ですよ。『一流品』、この漢字をじつと見てください。「いっぺん流れた品」と書いてあります。ここで笑つた方はわかつていらつしやる方です。

人間には執着があります。人間だれしもございます。

「皆人の心の奥の隠れ家に 仏も鬼も我も住むなり」という古歌があります。

心の中に仏も住んでいるけれども、鬼も我も

住んでいるということです。ですから、人間ほ

ど良いことをするものはおりませんが、人間ほど悪いことをするものもおりません。善も悪も好きも嫌いも全部この心の中に入っているんです。

最近新聞を読んでもいましたら、人間は八分間



に一遍、嘘を言うって書いてあったんです。よくしゃべるひとは、八分どころではないんですよね。そのとき私はドキッとしました。えらいこと書いてあると思いませんか。ですからこの中に嘘も本当もあるんです。どうやって鬼をとってしまおうかと考える前に、私は仏さんとはなんやろうと思ったほうが早いと思うんです。弘法大師さまは、『十住心論』で人間の心を十に区分けしています。その最後の第十に「秘密莊嚴心」というのがあるんです。人間の隠れたところの奥の奥に仏さんがおられると言ってます。だからその仏さんをめがけてズバツと入ったほうが私は早いと思うんです。

もう終わってしまいました。京都の立命館大学で宗教講座というのをやっております。学生さんも、一般の方も大勢いらっしゃる前話をしたのですが、その講義の後、学生さんが

「和尚、仏ってなんですか」と質問してこられました。これは難しいんですね。端的に仏って何かと答えるのは難しい。

宗旨によつて仏さんの扱いが違うんです。仏を一言でいうのは難しいんですが、現在あります仏教、すなわち禅や浄土や法華などの鎌倉仏教、天台や真言などの平安仏教、さらにすべての宗旨に共通したことがあるんです。それは何かといいますと、すべてのものに仏が宿するということなんです。

これを「草木国土悉皆成仏」というんです。天台の「本覚思想」という考え方なんです、草木も木も国土といった抽象物までも仏さんになるっていうんです。

もともとインドの『涅槃経』の中に「一切衆生悉有仏性」という言葉があり、この一切衆生というのは人間を意味しており、全ての人には仏さんが宿っていますということ。それが

だんだん発展し、中国から日本に来て、「草木国土悉皆成仏」となつて全てのものに仏が宿るという事となつたのです。

また、悉有仏性ではなく、「悉皆成仏」、つまり仏に成るとはつきりといっているのです。これを言い換えますと、全てのものに命が宿ると思つたらいいのではないか、「仏とは命や」ということです。全てのものに仏が宿るということだつたら、全てものに命が宿ると考えたほうが理解し易いのではないかと答えたのです。

年末の漢字一字は皆さんご存じですね。昨年「安」でした。その前は税金の「税」でした。ね。「命」という年もありました。

ところで書いているのは私なんです。ご存じでございますか？ この前、北海道の紋別に行つたんです。幼い子供が、「漢字書いているの知っているけど、おっちゃんは知らん」って

うんですよ。「水臭いやつちやなあ」と思ったんですけど、なんでかなと思つたら、大きなパネルに字をかきますとテレビカメラは私の後ろから撮っているの、後頭部しか映ってないんです。顔は映らないんですね。この前、NHKに行つた時にたまには顔を映したらどうですかといいましたら、「いりません。あんたはずつとむこうを向いていて下さい」と言われてしまいました。

あの年末の「今年の漢字」を書く時の筆はい筆を使っているんです。「牛耳筆」といいまして牛の耳の毛を入れているのです。

牛は放牧しますよね。雨が降りますと、雨がかかります。そうすると耳のなかに水が入りますので、耳の毛が水を吸収して耳に水が入らないようにするのです。だからこの毛は墨もちがいいっていうんです。これは昔から中国でも使われている伝統的なものなんです。これを太い

筆の真ん中に少し使えます。そうしますと、バーツと書いてもいっぺんに墨が出ていけません。

「今年の漢字」はもう二十一年になりますけど、はじめの時は、書く字を教えてくださいました。日本漢字能力検定協会の理事長さんが「和尚さん教えてあげます。和尚さんも急に言われても大変でしょう」「そうですね」「そうしたら、今年は〇〇という字です。云うたらあかんですよ」ということで「云うたらあかん」「云うたらあかん」と何遍もそう言われますと何かこう人に言うてみたくなりますよね。おしゃべりの女性はダメですね。聞いた途端に、「言うたらあかのやけどな」と言いながら電話するんですわ。その日のうちに町内みな知っておることになります。

「今年の漢字」は午後二時に書くのですが、その日の昼頃に理事長さんが見えないよう封筒

に入れて、これですといって持ってきてくれるんです。開けて初めて分かるんです。ですから今年はこの字かなと思つて毎年、手のひらに字を書くんですが、当たりませぬ。でも二十一年の間でいっぺんだけ当たつた字があるんですよ。関東の方は分からないかもしれませんが、「虎」でございます。これは十八年ぶりに阪神タイガースが蘇つたとき、絶対「虎」だとおもつたんですよ。関西の人はトラで沸き上がつておりましたから、間違いないと思ひました。

さて、字を書くときは筆を大きく跳ねたりすると墨が飛んできます。顔が真っ黒になります。それで「虎」の虎冠は跳ねると知つていたんですが、跳ねないで止めたんです。そうしたら、はがきに赤い字で、「あなたはご存知ですか？ 虎という字の虎冠は跳ねるのですよ」と訂正してきました。親切な人が多いですな。

昨年は「安」という字を書きました。書いて

から三十分くらいお経をしたり、御祈祷をしたりして後に寺務所に帰ってきます。すると二分後に電話がかかってくる、「なんであんな字書いたんだ」とか、「筆順が違ふ」とか、「あんなところは跳ねへんのや」とか色々と言ってきます。親切な人が多いのです。私はあの舞台上で漢字の書き取りテストをしているわけではないんです。ですので、少々のことは目をつぶつていただけるとありがたいんですが……。

先程も言いましたように「命」が選ばれた年がございました。

命という字は、白川静先生によりますと、命の令の部分人が屈んで神さまの声を聞いている形を表し、口の部分は、神さまに祈る感謝の言葉が入っている箱だと言っているんです。ですから人が神さまにお辞儀をしてありますが……でございますと、言っているのが命の原形だという

ことでございます。命って不思議ですね。なんで生きているのでしょうか？

自分の心臓は決して私が動かしているわけではないのです。

不思議なことに生きていますね。この間、「人間の血管」という本を読んでいたんです。

動脈、静脈、毛細血管から成り立っていますね。心臓から出た血液は動脈を通って全身へ送られ、そして静脈を通って、老廃物を持って帰ってきます。心臓を出た血液が一周して帰って来るのに一分かかるそうです。そうして動脈から静脈、それに毛細血管みんなを繋ぎあわせると、十万キロになるっていうんですよ。十万キロって想像がつかないでしょう。地球の一周が四万キロですから二周半になるんです。地球二周半を一分間で一周するんです。これはすごいですよ。人間の命、なにも人間だけではありません。

ませんが、命というのは誠に不思議なものでね。

皆さん今朝目覚めたときどうでしたか？

最初に何を思いましたか？ 今日には天気がいなと思ったのではないのでしょうか？ しかし、明日の朝、目が覚めるかどうかは、誰も保証できません。ずっと目が覚めないかもしれないです。

私はよく学生さんと話をするんです。学生さんに仏さんというとなんかアレルギーがあります。それで私は仏さんのことを命というんです。その命には見える命と見えないのちがあるんです。

目に見える命は生物的生命のことです。現に生きている身体です。この生きている命は見えないエネルギーによって支えられているのです。支えている宇宙の条件の一つでもかけたら、私

はここに立つておられません。宇宙総がかりで、私を生かせしめているんです。宇宙総がかりで道端に咲いているタンポポを咲かせているんです。その条件の一つでも欠けたら、存在しないんです。ですから見えない、いのち^ぢによって支えられているんです。誠に不思議なものです。

皆さん方は、恐らく今朝「京都市行ってくるね」といったら、「行つといでやす。お留守番してるさかいに、どうぞゆつくり行つておいでやす」といつてくれる方があから来れるのです。行つたらあかんという人がいたら出てこれないんですよ。見えなくてもその力が支えてくれているのです。その見えない力のお蔭で、その感謝によって見える命が成り立っているのです。

私は毎朝、本堂に五時に入るのを日課にしております。それからずっと諸堂を廻って寺務所に来て、朝一番に昨日の残務整理をして、そし

て自坊に帰るんです。

ある夏の暑い時でした。雨が降っていましたが、諸堂参りから帰ってくる際にはカーッと晴れていまして、山道を帰つておりましたら、前に若い青年がふらふら歩いているんです。後ろから見ても、ズボン上げたるかいなと思うくらい下がっています。なんであんな格好をしているんですかね。「おはようさん！」追い越す時に言うたんですよ。

そうしたら、黙っているんです。機嫌が悪いんでしょうな。もういっぺん大きな声で「おはようさん！」といったら、

邪魔くさそうに「おはよ」

「こんな朝早くからお詣りですか」って私がいったら、

「お詣りとちゃうんや。夕べな、京都で一晩中遊んでたんや。これから大阪に帰るんやけど、遠足で行ったことがあるし、いっぺんな」



「お詣りやないか」

「お詣りとちがう」

私だって、この人がお詣りにきたか、そうではないかぐらい分かります。

話のついでに言うただけです。それで私が「ど
うや、この朝の空気。おいしいやろ」と言った
ら、「おっちゃんこれくさいで、草のにおいや。
くさいくさい」って言うんです。

「なにいうてるんや。これが朝一番の取れた
ての空気や。すまんけど、京都の町の中ではこ
の空気は味わえへんで、朝早くこの山に來んと
味わえへんのや。この取れたての空気、あんた
の後ろのリュックサックに入れて持って帰って
かまへんで。風呂敷包みいっぱい持って帰って
もかまへんで」とこう言うんです。そうした
ら「なんでやねん」と言うんです。

「この空気、タダやからな。いくら持って帰
ってもいっこうに影響あれへん、かまへん」っ

て言ったら、

「空気はタダにきまつてる」と言い返してきます。

「そうか、タダに決まっている空気やけれど、この空気によって地上に生きている全てのものが生かされているんや。それがタダなんや。ありがたいことと違うか。空気だけと違うで、魚もきゅうりも大根もタダ、みんなタダや」って言うたら、

「おっちゃん、それはおかしいで。なんで、魚がタダや、キュウリがタダや、大根がタダや。おっちゃんスーパーへ行ったことないんか」って言うんですよ。

私だってスーパーに行ったことがありますよ。「あるよ」って言うたら、

「魚一匹千円って書いてあるやろ。タダと違うやん」と反論してきたんです。

そう言い合いながら、このとき私はこの若者

と同じ立ち位置で話ができると思いました。

「まあ聞け、落ち着きなはれ。漁師さんが立派な魚を釣ったとしよう。そしたら漁師さんがその魚さんにありがとうと言って百円でもあげているか？ そんな漁師さんどこにおる。こんな立派な大根できたといつて大根さんに十円でもあげているお百姓さんどこにおるか？ それやったら大根もタダや。キュウリもタダや。みんなタダと違うか。そりゃコストはかかる。コストはかかるけど、そのもの自体は大宇宙、大自然の恵みと違うか？ この宇宙や自然、あるいは人々や、見えないものによって支えられているのと違うか？」とこう話しました。

「あんたなんで字を読めんねん」って聞いたら、「わしら学校行ったからだ」って言うんですよ。

「学校行って誰が字を教えてくれはったんや。先生やろ。その学校は誰が出してくれたんや。

お父ちゃんとお母ちゃんやろ。そうしたら少なくとも先生、お父ちゃん、お母ちゃん、あるいは友達や先輩、後輩こういう関係のなかで成り立っているのと違うか？」とその若者に言ったのです。

「諸人よ思い知れかし 己が身の 誕生の日
は母苦難の日」

という古歌があります。私たちが生まれた日にはお母さんが生き死にわけて産んでくれたのです。誕生日にケーキ買ってきてロウソクを立てます。火をつけて、つけたら「早よう消し」って言われて消します。消すぐらいだったら初めからつけなければいいのと思えます。そして「おめでとう」と言つてケーキを食べます。これではあかんのです。「お父ちゃんお母ちゃん、おおきにありがとうございます」というのがあって、はじめて「おめでとう」なのです。

昔から、「めでたくかしく」といわれます。めでたいけれど、畏まる、この畏まる事が、めでたさをぐつと引き立てているのです。

ぜんざい 善哉も最後に塩を入れます。その塩の塩辛さが善哉の本来の味をぐつと引き立てるんです。

見えないのちに見える命は感謝をすることが大事です。これは、民族が違おうが、主張が違おうが、主義が違おうが、何処へ持つていても共通することです。見える命は見えないのちに支えられ、その見えないのちに「おおきに」といつて感謝を述べられるということが大事ではないでしょうか。

今日は、早朝からお詣りいただき、ありがとうございました。縁をつくつていただきました。また京都にお越しの際はお立ち寄りくださいますよう、誠にありがとうございました。

(平成二十八年五月十七日 清水寺参拝時ご法話)

〈連載〉

『普勸坐禅儀』に学ぶ その十

駒沢女子大学教授 安藤嘉則

〈本文 書き下ろし文〉

鼻息びそく微かすかに通じ、身相みじやうすでに調たえて欠か気き一
息いし、左右さうぶ揺よう振しんして兀ごつごつ兀ごつごつとして坐ざ定じやうして、
箇この不ふ思し量りやう底ていを思し量りやうせよ。不ふ思し量りやう底てい如何いかが
思し量りやうせん。非ひ思し量りやう。此すなわれ乃すなわち坐ざ禅ぜんの要よう術じゆつなり。

〈現代語訳〉

坐禅のときは、呼吸は鼻で静かに出入をしま
す。坐禅の姿勢をととのえると、欠気一息すな
わち大きく息をはき出してから息を吸い込みま

す。そして体を左右に揺らして坐を安定させて
から、微動だにしない不動の姿勢となり、不
思量底（思い量ることのないところ）を思量しな
さい。しかし不思量をどのように思量するので
しょうか。それは非思量（とらわれなき思量）
です。これは坐禅の要となる術です。

坐禅を組むとき、具体的な指導として調身・
調息・調心ということがいわれます。まず身を
調えてから、呼吸を調べ、心を調べていきます。

前回は、足を組んで手を法界定印にし背筋を伸ばして半眼にする、という調身について説明しましたが、この一節は調息・調心に当たる説明であり、坐禅作法でも大切なところ、まさに要術といえますが、今回は調息についてみていきたいと思えます。

この『普勸坐禅儀』では坐禅の呼吸について「鼻息微かに通じ」とあり、簡潔な説明です。すなわち坐禅中の呼吸の出入りは鼻で行います。「微かに通じ」という表現は少し曖昧な表現ですが、道元禅師は『弁道法』という本で、もう少し詳しく説明しています。

「鼻息は通ずるに任す。喘がず声せず、長からず短からず、緩ならず急ならず」

すなわち「通ずるに任す」とあるので、呼吸は力むことなく自然に任せます。そして音も立てず、間隔も短すぎたり長すぎたりしません。自然に鼻を出入りする息を見つめていくのが坐

禅の呼吸です。

ところで近年医療の分野で問題となっているのが、今の子供達や若者たちの「お口ぼかん」という生活習慣だそうです。これは私が治療を受けている歯科医師からうかがったことですが、「お口ぼかん」の人はずっと口が開いているので、口での呼吸、すなわち口呼吸こうこきゅうになっており、この口呼吸が身体に悪い影響を与えることが懸念されるのだそうです。

調べてみますと、口呼吸は鼻呼吸に比べて、A D H D や睡眠障害など様々な合併症を引き起こしやすいとか、口呼吸が常態化すると、前歯が出て来て歯並びが悪くなったり、姿勢も悪くなり猫背になる傾向があるという報告があることがわかりました。また歯科医師の佐野真弘氏は、最新の計測法（ベクトル脳機能N I R S 計測法）を用いた実験を行い、口呼吸の場合、鼻呼吸に比べて前頭葉に酸素消費をより多く生じ

ることを計測し、口呼吸では前頭葉の活動が休まらず、慢性的な疲労状態に陥りやすくなることを国際学会で報告しています。この前頭葉の慢性的な疲労状態が注意力の低下、学習能力や仕事の効率低下をもたらすのだそうです。

口をぽかんと開けている人は、どこか気の抜けた常態、集中力を欠いた散漫な様子に見えますが、それが近年の科学的研究成果に裏づけられるようです。そして、改めて大学の学生たちや駅などの人混みで注意深く観察してみると、「ぽかん」とまでいかなかったも、口が一センチ程度開いていて、いつも歯が見えている状態の人もかなりいることに気づきます。

さて、このように鼻呼吸は坐禅の呼吸の基本であるといえますが、坐禅中まったく口で呼吸をしないわけではありません。「鼻息微かに通じ」に続いて『普勸坐禅儀』では「身相すでに調べて欠気（かんき）一息し」とあります。こ

の欠気一息とは、坐禅を始めるときに鼻から大きく空気を吸い込み、口から吐き出す深呼吸のことです。これは下腹からきたない空気を意識して吐きつくす呼吸です。これを数回繰り返し、その後、鼻からの坐禅の呼吸に切りかえていくのです。

道元禪師は、大乘仏教の以前の呼吸法として数息観^{すうそくかん}、息を数える方法を紹介しています（『永平広録』巻五）。この数息観はインドの坐禅の伝統でありますが、日本でも臨済宗の修行道場でよく用いられています。坐禅で足を組んで集中しようとしても、なかなか心が定まりません。そこで吐くときに「ひと——つ」「ふた——つ」というように息を数え、十までいくと、また一に戻って「ひと——つ」とやっています。十一以降になると、数にとらわれることもあり、自らの呼吸に心を集中させていきま

これが慣れてきますと、随息観といって、一つ、二つと数えるのでなく、そのまま息を意識する方法を行います。この数息観や随息観は坐禅中、あちこち気が散ってしまいがちな心を息に集中することでいわゆる「心を一枚にする」ことができます。

また道元禅師はこの数息観に加えて大乘仏教の調息法として次のように述べています。

「乃ち大乘の調息の法あり。息は丹田に至り還た丹田より出づ。出入異なるといへども、俱に丹田よつて入出す。無常、暁らめ易く、調心得易し」

すなわち大乘仏教の調息の方法がある。息は丹田に入って、丹田から息を出す。息の出入りは異なっているけれども丹田から息を出入させるのである。この呼吸によつて諸行無常の道理を実感し、心を調べやすくなるのである。

ここでは大乘の調息の方法として、いわゆる

丹田呼吸が述べられています。丹田とは、おへその下、三寸（約十センチ）のところにある部位で、人の重心に当たるところといわれます。この丹田を意識し、腹に力を入れてゆつくりと吐いていきます。無理に力を入れる必要はありませんが、吸う息は自然に吸い、吐く息はゆつたり長く吐き尽くす感じですよ。

このような呼吸を行っていると次第に腹で坐禅している感覚をもつようになります。腹が坐っている状態ですよ。

道元禅師はこの丹田呼吸によつて「無常暁らめ易く、調心得易し」と述べておられます。一回一回の深い呼吸を意識し、この一瞬一瞬息づく、かけがえのない私の命を見つめ、同時にあらゆるものが移ろいゆくものであることを確認していきます。その無常なる事実をありのままに受け止め、心を調べていくのです。

仏教の基本的立場であり第一原則ともいうべ

き「諸行無常」の道理をこの丹田呼吸を実践することによって真に受け止めるといふことです。一呼吸一呼吸を意識するというのは一瞬一瞬の今を見つめ、この一瞬の今に息づく私の命を観じることです。

ところでこの丹田呼吸がストレスの多い現代人の心を癒す方法として注目されてきました。すでに戦前よりこの丹田呼吸法が心身の健康に有益であることが藤田靈齋の調和道において提唱されていきました。それを受け継いだのが村木弘昌先生です。村木先生は医学的に丹田呼吸法の効用を検証されて、『万病を癒す丹田呼吸法』『釈尊の呼吸法』等の多数の著作を残されています。

また近年、有田秀穂先生（東邦大学名誉教授）は坐禅の深い呼吸、丹田呼吸が脳のセロトニン神経を活性化させ、ストレスがあっても衝動的に怒りを爆発させることのない我慢強さ、安定

などをもたらしていることを明らかにされています。

アメリカではジョン・カバット・ジン博士が仏教の瞑想や禅の呼吸法を取り入れたマインドフルネス (mindfulness) というトレーニングが心の不安レベルを下げることを実験的に明らかにし、これが臨床心理学など心の問題に関する領域で実践されるようになっていきます。このアメリカ発の新たな療法は今や世界中で注目され、二〇一三年には「日本マインドフルネス学会」が発足しています。このマインドフルネスによって、気持ちちが落ち着いただけでなく、免疫機能が上がるなどの、医学的効果も検証されています。たとえば、インフルエンザの予防接種を受けた人、マインドフルネスのトレーニングを受けた人と受けなかった人を比較し、トレーニングを受けた人の方が受けなかった人よりも多くの抗体を生み出していたことなどの実験結

果がでていきます。

NHKも今年「NHKスペシャル シリーズ
キラーストレス 第二回 ストレスから脳を
守れ」が放映され、私たちの命を奪う可能性
のある「キラーストレス」に対する画期的なス
トレス対策が世界の最前線から報告されており、
最新科学によってその効果が裏付けられた療法
としてこの「マインドフルネス」が紹介されま
した。

この番組では、早稲田大学の熊野宏昭先生に
よって具体的にその方法が紹介されましたが、
それはまず背筋を伸ばして、両肩を結ぶ線がま
っすぐになるように座り、目を閉じ、呼吸をあ
るがままに感じるといふものです。その深い呼
吸によってお腹や胸がふくらんだり縮んだりす
る感覚に注意を向け、それを心の中で、「ふく
らみ、ふくらみ、縮み、縮み」などと実況する
といった工夫をします。この実況というのは南

方仏教のヴィパッサナーという瞑想方法の伝統
です。しかしどうしても湧いてくる雑念や感情
が浮かんできます。そうすると「雑念、雑念」
と心の中でつぶやき、考えを切り上げ、「戻り
ます」と唱えて、呼吸に注意を戻します。

ところで禅門ではこうした坐禅の効用という
ことについては積極的に説くどころか、逆にそ
うした効用を目的として坐禅することについて
は否定的な側面がありました。何かのためにす
る坐禅は「有所得うしよとくの坐禅」であり、坐禅の本質
的な意味とは異なるということです。

それはそうした呼吸法を使って、一時的に心
の安定感や開放感・爽快感などが得られたりす
るにしても、その開放感や爽快感は、あくまで
前の状態より改善されただけです。

一時的に開放感に浸っていても、また状況が
苦しくなると、またマインドフルネス療法をや
って開放感を味わうのであれば、薬や麻酔がだ

んだん効かなくなるように心にしっかりと根付くものでないのであれば、根本的な解決にはなりません。

このような坐禅とマインドフルネスの違いについては、善光寺で長らく坐禅指導をなさってきた藤田一照老師が今年の夏に刊行された『精神療法』（第四十二巻第四号）に「マインドフルネスと無心―無心のマインドフルネスに向かつて」なる論稿で重要な指摘をなさっております。藤田老師はアメリカのマサチューセッツにおいて禅堂を開かれ、マインドフルネスの創始者、ジョン・カバット・ジン博士とも交流なさっておられました。先日藤田一照老師が善光寺に來山され住職、副住職と共に、このマインドフルネスの現状をうかがうことができました。

これからこのマインドフルネスは日本でも新しい精神療法として取り入れられてくるでしょう。

うが、それは仏教や禅の瞑想から発しながらもその宗教性を排除したものです。医学療法としての宗教的中立性というメリットもあり、だからこそ欧米のクリスチャンにも応用できる療法なのですが、やはりその宗教性の消去によって失われたものも大きく、そこを藤田老師が指摘するところであると思います。

坐禅の調息はそのまま調心へつながっていきますが、この調心で説かれるのは非思量というとらわれなき思いです。思いの手放しであるこの「非思量」が坐禅の要術となってくるのですが、これについては次回説明いたします。



いのちをおさめる

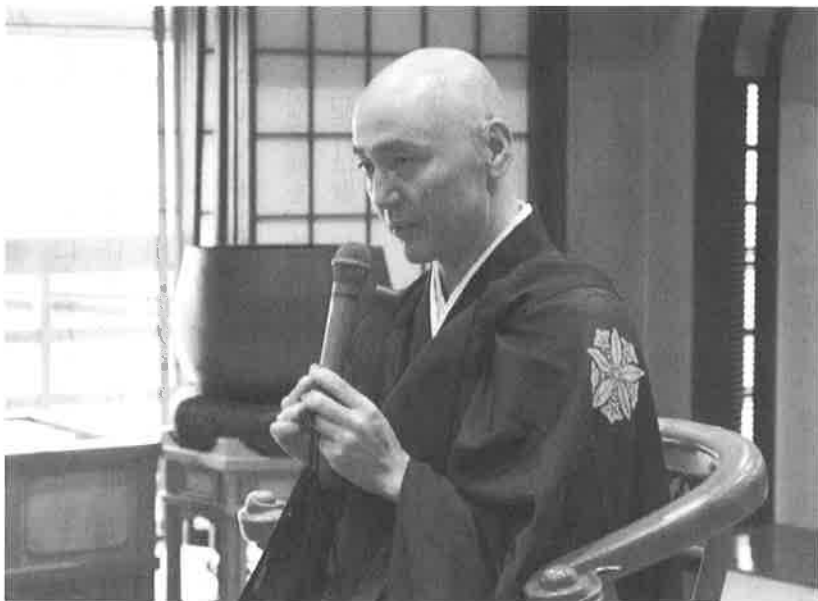
長泉寺住職 水庭 浩章

「人生は、長短に関わらずパーフェクトである。人生は長い短いにかかわらず完全である」この言葉は、入江杏さんという方が、講演会の中でおっしゃった、私にとりまして、とても印象に残ったお言葉です。

昨年もお話しいたしましたが、私は今、東京都港区にありますが大本山永平寺別院長谷寺という修行道場に勤めています。福井県にあります大本山永平寺の東京別院として、現在三十名の修行僧と、十三名の指導役である役寮と、併せ

て四十三名で日日修行生活をおくっています。私は、そのお寺で人権学習の担当を仰せつかっております。毎年複数の修行道場が一か所のお寺に集まり、一泊二日の日程で人権学習会を行っているのですが、昨年は、私どものお寺が当番でした。

当番に当たったお寺では、学習カリキュラムの作成や資料作り、部屋の準備等を行います。中でも、私が悩んだのが、講師の選任でした。特別、当てもなかったのに、インターネットで



調べるしかないと思い「人権学習の講師」と打ち込んで検索していた時に、入江さんのことを知りました。

今から十六年前、西暦二千年の大晦日、皆様どのようなことがあったか覚えていらつしやいますでしょうか。

世間を震撼させた大事件、一家四人が尊い命を奪われた、所謂「世田谷事件」。入江さんは、被害にあわれた奥様の実のお姉さんです。

偶々インターネット上に、入江さんが以前に講演された様子が掲載されておりました。その講演のタイトルが「突然の別れ・喪失と悲しみからの再生へ」犯罪被害やその家族の人権を考える」というもので、私たち僧侶が決して目をそらすことが出来ない重要なお話をしていただけと考え、講師の依頼をしたところ、私でお役に立てるのであればと快くお引き受けいた

できました。

事件当時、被害にあわれた妹さん一家とは壁一枚隔てた二世帯住宅に、入江さんは、夫と息子さん、実のお母様と四人で暮らしていました。妹さん一家と合わせると、八人の大家族で、とても仲良く、幸せに暮らしておりました。

そんな家族を、突然四人も失ってしまう。しかも、犯行は壁一枚隔てた隣で起こっていた。

その講義でお話しくださいました事を少しご紹介いたします。

理不尽な暴力により、一瞬にして大切な家族四人を失った入江さん。あまりの突然の別れにより、耐え難い悲しみ、苦しみに襲われました。犯人に対する怒り、きつと助けを求めたに違いない妹家族四人を救えなかった自責の念。

絶望のどん底に突き落とされただけでなく、周囲の偏見、心ない報道など、さらに追い打ち

をかけるようなことが続く中、死んでしまったと思う時期もあったそうです。

事件後、入江さんにとってなかなか受け入れることのできない言葉があったそうです。

それは、「このような最期を遂げて、無念だっただろう」とか、「小さなお子様のことを思うとかかわいそうでならない」とか、ありふれたお悔やみの言葉ですが、入江さんの心には全く響きませんでした。

「四人の人生はそんなに無念だったのだろうか。そんなに可哀想な人生だったのだろうか。」

事件から六年後、入江さんに転機が訪れます。事件後、さまざまな出会いの中で知り合った出版関係の方から絵本の創作を依頼されました。

「四人は、ただ理不尽な事件に巻き込まれた

可哀想な一家ではない。それぞれに輝かしい人生を歩んでいたのだ。そのことを、私が四人に代わって伝えていこう」

その様な思いから、入江さんは絵本を創作し、また、絵本の読み聞かせの活動を始めました。そして、現在は、自らの体験を活かし、犯罪や災害で大切な人を失った方々への心のケア「グリーンケア」に力を注がれています。

入江さんのお話を伺い感じたことをとても語り尽くせませんが、ひとつ心に残った言葉を紹介します。

「存在しないものの存在を想像する力、あるいは、あるものが存在しているときに、それが存在しなくなるかもしれないと感じられる力」という言葉です。

この世は無常であり、常に移り変わっていく。目に見える世界だけがすべてではない。それが、この世の真実のありようです。

皆様の中にも、目には見えないけれども、たくさんのいのちをそれぞれがおさめられている。意識する、しないに関わらず、納めている。そのたくさんのいのちが、自分の一部となり、知らず知らずのうちに支えてくれている。

皆様、それぞれの人生の中で、そのようなことを感じたことはございませんか？その感性を大切にしていくことが、とても大事なことです。

私たち僧侶が勤めている葬儀も同様です。亡き方を、ただ不確かな異次元の世界にお送りすることが葬儀ではありません。そんな無責任なことを私たちはしていません。

ご遺族の皆様と一緒に、亡き方の御いのちを僧侶自らの中に納めていく。

この両の眼で見える世界では、亡くなった方のいのちは尽きてしまっただけではいるけれど、目に見える世界がすべてではない。

いつでもここ（胸の中）にいる。そのお姿は見えないけれども、お声は聞こえないけれども、いつでも私の中にいて、時には厳しく、時には慈悲のまなざしをもって見てくださっている。ですから、私の行いが、私がいのちを納めさせていたでいる人々を善くもするし悪くもする。その覚悟をもって、いつでも勤めています。

今から十六年前、私は二十七歳で山梨県甲府市の長泉寺というお寺の住職に就任いたしました。就任当初、お葬儀を勤める時にはいつもビクビクしながら勤めていました。口には出しませんでした。自信を持っていませんでした。しかし、今は違います。今なら堂々と、自信をもって言えます。私が勤めれば大丈夫だと。

何故なら、葬儀の時間だけがすべてではない。

その方の御いのちを自らに納め、ずーっと一緒に生きていく。私が死ぬまで、いや、私が死んでも弟子がいればその弟子に至るまで、いつでも生き続けている。それが、いのちの相続です。亡き方のいのちの灯をそこで消してはならないのです。

その覚悟が決まった時には、私が自信なく葬儀をお勤めさせていただいた亡き方々も迷わすことは決してありません。私の中に納めさせていただいでいるのですから。

いつでも、どこでも、胸を張って堂々と、「私が勤めてよかったでしょ」と言える和尚であり続けるために、日々精進していく。また、たくさんのお納めした御いのちが、私をそのように動かしてくれる。今の私があるのは、間違いくそのお蔭です。

私事で恐縮ですが、昨年は一月に師匠を亡く

し、年末には祖母を亡くし、葬儀で始まり葬儀で終わる一年でした。

私が今つとめている永平寺東京別院に就任したのが昨年一月十日でしたが、師匠が亡くなったのは一月六日、長谷寺就任四日前のことでした。そんな事情から、慌ただしく仮通夜、茶毘式だけをすませて、すぐに東京に向かいました。

本葬まで、約三週間あったのですが、打ち合わせ以外、殆ど帰ることはありませんでした。お盆の期間中も、新盆にも関わらず、一度も師匠のお参りをしませんでした。

祖母が亡くなったのは、暮れの押し迫った二月二十四日、悲しむ間もなく大慌てで日程調整をして、十二月二十六日、二十七日にお通夜・お葬儀を済ませ、二十八日には東京に戻り、正月準備をしました。

年末年始は、正月行事の為に東京と山梨を行

ったり来たりと大忙し。とても祖母のことを思い返して悲しむ暇ありませんでした。

確かに、師匠と祖母の他界は大きな悲しみや寂しさがありますが、そのことを忘れるくらい忙しい日々を送っておりまし、今現在も同じ状況です。

冷たい弟子、或いは孫のように思われるかもしれませんが、私はこれでいいと思っています。私が和尚として成長して、その結果、私の行いが世のため人のためになれば、そのことこそが、師匠や祖母に対する一番の恩返しになると思っています。

また、昨年、一年前にもお話し致しましたが、私の連れ合いの大病もありました。当初の検査で悪性と言われたときには、とてつもない大きな不安を抱きました。恐らく妻は、気丈にふるまってはいましたが、私以上に不安を抱え

ていたことでしょうか。

本来なら、夫である私が傍にいてやりたいという思いはありました。妻も恐らく本心ではそう思っていたと思います。しかし、私たちは、通院とか検査、手術の時には傍にいましたが、一緒にいる時間は最小限にして、私は東京で修行僧と向き合い、妻は甲府で闘病しながらお寺を守るという選択を致しました。

その代り、いつでも真剣に修行僧と接し、お互いに成長をする。「衆生済度」人々の救済という大誓願をお互いに実現できるように和尙になる。そのことが世の為人の為となり、間接的に妻の為になると考え、二人で話し合い、極力それまで通りの日常を保つように努めました。

福井県にあります大本山永平寺を開かれた道元禪師様には、お師匠様が二人いらっしやいます。一人は当時の南宋、現在の中国浙江省、天

童山景德寺の住職を務めていた如浄禪師という方です。

比叡山で僧侶としてのキャリアをスタートさせた道元禪師でしたが、ある大きな疑問を抱きます。

それは、当時日本に伝えられた仏教の中に、「人間は本来皆、仏を備えている」、という言葉があるのですが、それならば何故、過去の高僧たちが厳しい修行を修めてこられたのか、というものです。その疑問を解決するために、博多より船に乗り当時の南宋、今の中国に向かい、二年の歳月をかけて漸く求めていた師匠、天童如浄禪師と出会い、それから二年間、如浄禪師のもとで修行を修められました。

如浄禪師の教えとは、師匠から弟子へと余すことなく受け継がれる、云わば「仏のいのちの

相続」です。当時の日本仏教は、どちらかと言えば学問的に教えを学ぶということがほとんどで、師匠と共に生活をし、純粹に師匠のいのちをそっくりそのまま相続するということがありませんでした。

先ほど申し上げた私たちの葬儀に対する姿勢も、この道元禅師のお示しにある通りに行じております。

その「仏のいのちの相続」をすることにより、本来自ら備えている仏を具現するのです。

さて、道元禅師のもう一人のお師匠様は、道元禅師と同じく疑念を抱き、共に南宋にわたった明全禅師というお方です。

比叡山にいても自らの疑念を晴らすことができないと悟った道元禅師は、比叡山を下り、当時南宋に渡り、禅の教えを学んできた京都、臨濟宗建仁寺の栄西禅師を訪ねます。しかし、栄

西禅師は高齢で、そのお弟子の明全禅師について禅の家風を学ぶようになりました。

明全禅師は、道元禅師と共に南宋に渡ることを志し、いよいよその日が迫ってきたある日、建仁寺にいる修行僧たちにこんなことを問います。

「私の育ての親であり師匠でもある、比叡山の明融阿闍梨が大病を患い、余命いくばくもない状態である。師匠は『せめてお前ひとりだけは儂を看取ってから、宋に渡る希望をかなえてくれないか』と言っている。私は幼少のとき、両親の家を出て以来、この師匠に育てられ、お蔭で今これまでに成長できた。

この師匠の御恩でないものはない。しかし、今こうして身命を顧みずに南宋に渡って真実の教えを求めるのも、大きな慈悲心からであり、人々



の為になろうとしてである。師匠の仰せに背いて南宋に出かける道理はどうかであろうか。皆さん方の意見をお聞きしたい」と訊ねます。

建仁寺の修行僧の多くは、今年の南宋行は中止して、来年その目的をはたすように勧めました。そうすれば、お師匠様の仰せにも背かず、一年遅れてしまいが目的を果たすことが出来るというのが大半の考えでした。

明全禪師は、皆の意見を聞いてこういわれました。

「皆さんの意見は、いずれも今回の南宋に行くことはやめた方がいいとの話を賜りました。しかし、私の考えは違う。此の度行くのをやめて、看病をしたところで命が延びるわけでもない。仮にそのようなことをしたら、師匠は間違つて弟子の志を妨げることになろう。反対に、私が南宋にいつて志を遂げたのならば、師匠の

情には背いても、多くの人々を救うことができよう。それこそが師匠に対する一番の恩返しである。もしも、志を遂げる前に私が命を落とすようなことがあっても、教えをもとめる志をもって死ぬのであるから、将来に志を遂げることのできよう。これによって、私の南宋行きの決心は揺るぎないものになった」

そのように云われ、明全禪師は道元禪師と共に、南宋に向かわれました。

実際、明全禪師は南宋にて病を患い、命を落とすことになりましたが、その志は道元禪師に受け継がれ、道元禪師は天童如浄禪師のもとで、おさとりを開かれました。

その道元禪師の中には、明全禪師の御いのが余すことなく相続されています。道元禪師が志を遂げられ、自らの疑念を晴らした時には、明全禪師も同じように志を遂げ、明全禪師の師

匠、明融阿闍梨も同じく志を遂げられたことになります。いのちを納め、生かしていくということはそういうことなのです。

このような過去の偉人の生き様から見ても、私と妻の出した答えが間違いではないと思えますし、また、師匠や祖母の為にも、私が修行僧と真剣に向き合い、自分自身を成長させていくことが何よりも供養になると確信しております。私の行いが、師匠や祖母、また、ご縁を頂いた、いのちを納めさせていただいた方々を善くもするし悪くもすると肝に銘じ、日々修行に励んでおります。そんな姿を、病気を患った妻も応援してくれています。

さて、私たちの修行では食事に重きを置いています。なぜなら、私たち人間が生きていくためには、食事を頂かなくてはならないからです。

その食べ物はいのちそのものです。そのいのちを、厳しい言い方をすれば殺生して、私たちは自らのいのちを繋いでいます。その食事をいただけるだけの行いを日常しているのか、感謝の気持ちで頂いているのかどうか。お肉に限らず、お米やお野菜も生きていたものです。

そのいのちを頂くということは、一人にひとつのいのちではなく、数えきれないほどのいのちがひとりひとりにはある。それは、食事として頂きたいのちだけでなく、意識する、しないに関わらず、ここに納めさせていただいた方々のいのちも同様です。無量のいのちを皆納めている。

その現実を目を向ければ、どの人も、とてもかけがえのない尊い存在であるということが理解できますね。

私たちの社会では、立場の違いはあります。しかし、それはあくまで立場の違いであって、そのことが人間の善し悪しをつけるものではない。人間に上下はありません。誰しもが、平等に、掛け替えのない存在である。

修行僧を見ていると、物覚えがいい者もいれば、悪い者もいます。体が丈夫なものもいれば、弱い者もいる。精神的に強い者もいれば、反対に打たれ弱い者もいる。しかし、私たちはそのようなことを基準に人間の善し悪しを決して決めません。人間に偏差値などつけられないのです。みんなかけがえのないお互いです。

そのかけがえのない人生を支えてくれているのが、目に見えるものばかりではない。目に見えない大切な亡き方々、或いは自らの中に納めたすべてのいのち、そういうものに思いを廻らせながら、感謝できる感受性をもって生きるこ

とが、人生をより豊かなものにしてくれること
でしよう。

今日、お話し致しました事は、私自身が昨年
体験し、その中で救われてきたことをお話しさ
せていただきました。今でも思い起こすと大き
な悲しみは癒えないし、大きな不安も拭うこと
はできません。しかし、これも自分に与えられ
た人生からの問いであると捉え、その問いに答
えていく毎日を送っています。

お話の最後に、更に私自身が救われた力強い
お言葉を紹介して、お話を終わらせていただ
きます。

私の大好きな、江戸時代の禅僧、天巖祖暁と
いうお方が、自らの師匠のことを想って残され
た七言絶句です。

幾たびか、打着に逢うて旧瘡班たり

往時を追憶すれば、毛骨寒し
快活は、当に痛処より得べし
即今翻つて恨む、
棒頭の寛なりしことを

祖暁和尚のお師匠様はとても厳しい方だった
のでしよう。そのお師匠様には、おそらく、坐
禅の時に使う警策という棒でしょうが、その棒
で幾たびか厳しく打たれたことがあり、その時
の傷跡は今でも斑に残っている。その時のこと
を思うと身の毛もよだつ思いで、今でも寒気を
憶える。

しかし、そこで転句。今の充実した快活な思
いは、当にその痛みから感じる事ができる。
今、翻つて恨む。何に対して恨むのか? 「棒頭
の寛なりしことを」、もつと打つてくれればよ
かったのにと。なかなか言えることではない
ですよ。

お師匠様の厳しさがあって、今の自分がある。祖暁和尚は決して師匠を恨んでいるのではなく、祖暁和尚らしくひねくれているのですが、物凄くお師匠様に感謝していることがこの詩偈から窺い知ることができます。

私たちが生きていくうえで、お互い、辛いこと、悲しいこと、逃げ出したくなることもあるでしょう。人生そういうものですから。

しかし、苦しみの数々は、必ず未来への快活に繋がっている。お互いそのことを信じて、今を大切に歩んでまいりましょう。信じる者は救われる。

そして、祖暁和尚のように言ってみましょう。もつと苦しめてくれればよかったのにと。

心の底からその言葉が出るときには、心は平らかで、充実した、快活な人生を送っているは

ずです。ここに（胸に）納めている御いのちと共に。

「人生は皆、パーフェクト」です。





おびんずるさま

先代住職が発願し平成四年から少しずつ羅漢像をお迎えし、実に二十三年の月日をかけて昨年五月に五百体揃った羅漢さま。長い年月をかけて漸く揃った羅漢さまを皆様に観て頂きたいと釈迦殿と不動殿の渡り廊下を改装してお祀りしております。(詳しくは成寿四十五号をご覧ください)
下さい)

『五百羅漢』の他にも信仰の対象となる羅漢像に『十六羅漢』があります。その『十六羅漢』の第一が賓頭盧(びんずる)尊者。通称『おびんずるさま』と親しまれている羅漢さまです。

『おびんずるさま』は触れていただけのお仏像として知られています。じかに触ってお祈りできることから「なでほとけ」とも呼ばれ、昔から自分の身体の悪いところと「おびんずるさ

ま」の同じところを交互に撫でると除病の功德があると信仰されています。

さてこの春、善光寺でも「おびんずるさま」をお迎え致しました。そのきっかけになったのは昨年五月の信州善光寺参拝旅行の時のことです。

七年に一度の前立本尊御開帳に合わせての参拝。本堂へ続く階段を登りきると大勢の人に囲まれた『おびんずるさま』がお祀りされています。長年、手の痛みに悩まされていた住職のお母様も一度お願いしてみようと列に並ぶことにしました。順番が来ると「どうか、この手の痛みが癒されますように」と藁にもすがる思いで『おびんずるさま』の手と自分の手を一心に撫で続けました。

旅行から戻り数日が経ったある日。何気なく手を触ると今までの痛みがなくなっているでは



式開に法難追分節

ないですか。信じられないという気持ちと共に「私のように身体の痛みで困っているたくさんの人を救われるのではないか」という思いが脳裏に浮かび、その思いを住職に伝えられます。

「『おびんずるさま』をお迎えして、この御利益を檀信徒の皆様方と共に分かち合いたい」

住職もお母様のこの篤い思いを受け止め動き出しました。

『おびんずるさま』のお力があつてのことでしょうか？ 話はトントンとスムーズに運び、今年節分には開眼供養を執り行い、善光寺にお迎えることになりました。

ご寄進頂いたお母様曰く「この『おびんずるさま』のお力はすごいよ。是非お参りに来て元気になってお帰り頂ければ嬉しい限りです」と微笑まれます。

『おびんずるさま』をお祀りしているお寺は

多々ありますが、本堂の正面にお祀りされている事は少なく、多くはお堂の入口や外側・後方にお祀りをされております。何故でしょうか？

お釈迦さまと同時代を生きた『おびんずるさま』。お釈迦さまに巡り合い発心されお弟子となり、修行を重ねついに羅漢に座し「神通力」を得ます。この「神通力」とは不思議な力の事。しかし『おびんずるさま』はついこの不思議な力を世間の人々に自由に誇示し見せびらかしてしまいます。それを知ったお釈迦さまはお叱りになり、「お前は涅槃には至らずに、この世にとどまって仏法を護り人間の病を癒し、多くの衆生を救いなさい」と申し付けられました。

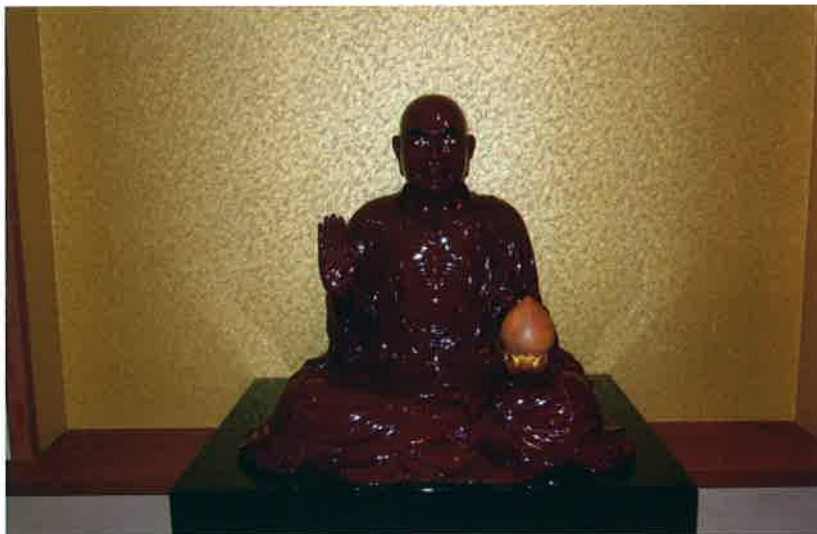
『おびんずるさま』はそのお言葉を守り、今に至っても人々を救う為に修行されているといわれます。

お母様の「皆様に元気になっていただきたい」

という発願により善光寺に祀られ今でも人々を救う為に修行されている『おびんずるさま』。ご自分の除病の功德と共に人を救いたいと願う「仏の心」に触れていただけたら幸いです。

皆様もぜひ善光寺にお越しになり『おびんずるさま』を撫でてお参り下さい。





おびんずるさま

「びんずる尊者」はお釈迦様の弟子で、十六羅漢の筆頭です。

別称「おびんずる様」とか

「なでぼとけ（撫で仏）様」とも呼ばれています。

優れた神通力で、患う人、病氣の人また、体の不自由な人や痛む人にお力を与えてお助けになる羅漢様です。

本来、本堂の外陣・前縁などに
おびんずる様を安置し、病人が
自分の患っている箇所と同じ部分を
何度も撫でるとそこにお力が加わり
病氣が治ると信仰されています。



■恒例 善光寺旅行会

平成二十八年五月十六日・十七日

京都清水寺参拝

恒例の善光寺旅行会主催の参拝旅行、今年も京都清水寺を参拝致しました。

新緑の季節、住職をはじめ総勢五十四名、一泊二日の参拝旅行となりました。

【第一日目】

午前七時に新横浜駅集合。新幹線で米原駅迄行きバス一台に乗り換え、まず「彦根城」の見学です。日本で天守が国宝になっている四城の一つです。

こけら葺きの屋根が美しい馬屋や井伊直弼ゆかりの埋木舎、葦の整った白壁沿いに外堀を歩き、太鼓門櫓、天秤櫓、西の丸三重櫓、「日本の音風景百選」の一つ「時報鐘」など、ガイド



←博志方丈(左)と
興聖寺住職(右)



さんによる詳しい説明を聞きながら天守閣へと登ります。長い距離を頑張つて歩いた先には、琵琶湖畔と佐和山城跡を一望できる素晴らしい景観。

戻る足で玄宮園という大名庭園で班ごとに記念撮影を致しました。

その後、琵琶湖を北上、湖西、滋賀県高島市朽木岩瀬にある曹洞宗寺院高巖山興聖寺へ拝登。「関西花の寺二十五霊場十四番」に指定されています。風景が宇治興聖寺に似ていたことから道元禅師が建立を勧められ、曹洞宗第三の古道場といわれてきました。

お寺の副住職は善光寺住職と永平寺で共に修行した仲。久し振りの再会も束の間の本堂へ移動し読経御回向。国の重要文化財「本尊釈迦如来坐像」を拝観。

森泰孝住職よりお寺の縁起や、秋篠宮様との



思い出話などをまじえた楽しいご法話を頂戴いたしました。

国指定の名勝旧秀隣寺庭園を見学し、住職以下ご家族にお見送りいただきながらお寺を後にしました。

【第二日目】

翌日、京都音羽山清水寺へ。

大講堂にて清水寺貫主の森清範猓下より親しくご法話を頂きました。

(森猓下のご法話は14ページをご覧下さい)

住職の御母堂、倫子様のお進された石碑「瑩山禪師と清水の観音さまとの深いえにしを報恩顕彰する碑」の前にて全員で読経。その後、諸堂をのんびりと拝観し昼食。祇園でお買い物物の一時を過ごし、京都駅から帰路につきました。

天候に恵まれ、一切事故もなく老若男女皆仲良く楽しい有意義な参拝旅行でありました。



道標 建立



平成二十八年師走
 善光寺 二世中興
 大圓武志大和尚十三回忌報恩
 三世大莞博志代
 父秀行遺志相承 鳥居悟建立
 京都清水寺貫主
 森清範猊下御書

清水寺参拝旅行

参拝者の声

東京台東区 山口幸枝様

お写真お贈りいただきましてありがとうございます。貴重な体験をさせていただきました。本当に楽しい旅行でした。又、ぜひお誘い下さいませ。

福田道子様

善光寺様主宰の京都清水寺参拝の旅は深緑の中、お天道様にも可愛がられました。顔見知りの方達も多く、何よりお接待？のお坊様方のさびさびした御配慮ある行動が素敵。私達も十五

年前はまだ若かった！

そうですね。あの時は黒田武志方丈様が御一緒でした。今回、お写真の中の笑顔をご持参なさいました奥様、とても意味ある旅だったのでしょね。

幽玄、夢の散華のヒラヒラ散る様子。これが最後の旅と言っていた友が来年も参加したいねと笑顔でささやきました。

横浜市鶴見区 古賀孝子様

ご住職様

先日は京都の旅行では大変お世話になりました。お写真とご挨拶状まで頂きました。私も檀家でもありませんのにお声を掛けて下さいましてありがとうございます。

います。

この度も心にしみる法話を聞き、ほんとうに嬉しく思っております。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございました。



神奈川県三浦市 吉田俊朗様

吉田文字様

拝啓 梅雨に入り毎日うっと
おしい季節になりました。先日
はお写真をありがとうございました。

お天気にも恵まれて京都清水
寺に参拝する事が出来ました。
主人が大病した為にしばらく旅
行に参加しませんでした。今
回は久しぶりに一緒に参加させ
て頂き、又、皆様と共に交流が
出来てうれしかったです。

ご住職様はじめ寺の関係者の
方々のご配慮もあり、大変楽し
い旅行会でした。無事に旅行が
出来たこと、本当に感謝の気持
ちでいっぱいです。

善光寺の皆様のご健康と繁栄

を願っています。

かしこ

都築区 池本末恵様

先日はお世話になりました。
お陰様で個人では経験できない
貴重な旅行をさせて頂きました。

又、記念写真をお送り下さり
ありがとうございました。
今後共よろしくお願い致しま
す。



横浜市港南区 池田耕三様

池田裕子様

拝啓 梅雨入りのたよりも聞
こえて参りましたが、お変わり
なくお過ごしのことと存じます。

この度は旅行会の写真を送り
いただきましてありがとうございます。

初めての参加でございました
が、皆様にはあたたかくお仲間
に入れていただき、本当にあり
がとうございました。次回の旅
も楽しみにしております。どう
ぞ、よろしくお願い申し上げます。

まずは御礼まで申し上げます。

東京都大田区 齋藤貴美様

拝啓 先月は写真ありがとうございます
ございました。親子で旅行が
来て本当に楽しかったです。

善光寺さんで娘を使つて頂き
ありがとうございます。多々い
たらない点があると思いますが
よろしくご指導の程お願い申し
上げます。お寺さんでお手伝い
できることは最高の幸で癒さ
れ、本来の元気な娘に戻ると思
います。

敬具

横浜市旭区 村上洋子様

前略 この度の善光寺旅行会
では色々お世話になりました。
通常叶わぬ由緒ある寺院の見学
や著名なご住職様にお目にかか

れたりと実現し得ない体験をさ
せて頂き感謝しております。

本当にありがとうございますまし
た。

小川かよ子様

善光寺の皆様

過日の旅行におきましては大
変お世話になりありがとうございます
しました。

又、写真を送つて下さいまし
てありがとうございます。楽し
い思い出がよみがえつてまいり
ます。温かい出会いの中にご縁
を感じ大変嬉しく思いました。
帰路にてごあいさつができず申
し訳なく思っております。

書中にて心より御礼申し上げます

ます。

神奈川県海老名市 高橋隆蔵様

私の心の写真に数々の思い出
が刻まれている。京都の清水寺
の舞台。表舞台に足跡をのこす
ことが出来たこと。旅行の宝物
です。







黒田武志善光寺前任職が発願し発刊された『成寿』も四十六巻を数えます。

檀信徒の皆さまに親しみを込め、解り易く仏教を説き続けた先代方丈さまの

お心を今一度追慕し『成寿』に掲載されたお話を再録させて頂きます。

エネルギーシユな先代さまのお声が甦るようです。

おもいやりの心 —— 禅仏教の展望と真の教育 ——

善光寺住職 黒田武志

一、真の教育（智慧と知識）

いま世界は疲れています。原因となる徴候は、様々な現象としてもたらされ、数えあげればキリがありません。また人間と自然界の間にも理

解しがたい現象や恐怖、対処のしようもない出来事など想像だにしない複雑な苦悩の中にあります。「一体どうすれば」この苦悩と恐怖から逃げられるのか、社会生活の規範である道徳で

救い得ないとするならば、「宗教」に求められる役割と責任は重大です。地球は、国は、社会は、個人は、興廢と疲労を遺し、いつ癒され、本来の姿に戻れるのか、大きな課題です。本会議のテーマは、実にその危機感と如何にすれば解決できるのか、仏陀の教える尊い真理に心を致し、今何か行動を起こす時だということを示唆しているように思います。宗教としての仏教、その一翼を担う仏教こそに究極の真理を求め、苦悩の本質を知って、その消滅と苦悩からの解放を理性的に体現させる必要性を今ほど感じる時はありません。しかし如何せん仏教を伝えるということは、安易ではありません。伝える者の素養として、事物の無常、皆苦、無我という理を実践体系的にもつ必要があります。

さて真の教育とは何でしょうか？これにひとことで答えることは至難です。この問いに禅仏教の伝統にのっとりて考えるならば、三つの

キーワード、即ち、「智慧」「不断の実践」「正しい生活」という言葉が浮かび上がってきます。

「仏教」は、文字通り私たち衆生が「仏になるための教え」でもありません。ではどうすれば仏になれるのか、その智慧とは、その洞察力とは、事物の本質に迫るとは、などに求めて私の信念とする仏教を述べてみたいと思います。

多くの大学ではさまざまな分野の知識をカバーした教育プログラムを提供していますが、真の教育というものはデータやある種の技能の取得だけに関するものではありません。学歴や職歴を發展させ、また、我々が直面する世界的な問題と取り込もうとする若い人たちにとって知識というものは、特に二十一世紀の情報化時代、大切なものです。が、それだけでは充分ではありません。教育は、生活面での現実的満足という個人的レベルのものであれ、その時代の大きな問題を解決するという広いレベルのものであ



国交樹立50周年記念 スリランカ訪問・友好親善使節団にて

れ、ただ知識だけのものであってはならず、洞察力に富んだ智慧と解け合ったものでなければなりません。ここにおいて仏教的取り組みは、教育に対して貢献することができるだけではなく、二十一世紀の繁栄を目指す時になくはないものなのです。

大乘仏教の伝統を伝える私たちの理想とする「菩薩」とは、智慧と思いやりの性格を備えたお方であるとよく言われます。ここで智慧（サンスクリットで *prajna* プラジュニヤ）というのは単なる知識ではなく、自己と世界の性質についての深い洞察のことです。知識はデータとして受け渡しができ、情報として記憶に残せるものですが、智慧はもっと深いものです。智慧は、深い理解や賢明な決断をするために心を如何に使うか、その洞察力を与えるものです。

智慧は文殊菩薩にたとえられることがあります。禅仏教の通常の瞑想堂にはこの菩薩像が堂

の中央部に安置されています。片手に剣を持つ

ています。この剣は妄想と無知を切り払う能力を表わします。貧困、飢餓、環境破壊といった世界規模の諸問題の多くも妄想と無知の結果である場合が多いようです。人は困苦の源たる妄想や無知を切り払うことによつて自己を自由にし、物事を明瞭に見ることができるようです。この仏教的取り組みはキリスト教でいう「真理は汝を自由にする」というのと非常によく似ています。智慧を養い真理を体得することは、仏教的生き方の重要な様相です。先に言いましたように、大乘仏教では「智慧」と「思いやり」の二つを重要なものと位置付けます。「智慧」が鳥の翼の一翼なら、「思いやり」(サンスクリットで karuna カルナ)はもう一方の翼なのです。両翼がなければ鳥は飛べません。言い換えると、思いやりのない智慧は潤いがなく、消極的です。逆に、智慧を欠いた思いやりは誤った方向に行

きかねません。

このように、教育は存在する全てに対し深く思いやる心を養うことを重要とせねばなりません。昨今多くの教育機関の傾向である専門化や個人のキャリア志向、この是非はさておき、教育者にはなぜ教育に携わるのかという大きな心象図を先ず心に持つ必要があると思うのです。教育は、自分たちのためだけでなく遍く全体的なものへと「思いやり」を致せる心の育成、他の人や万物のためになるという生き方を果敢になしうる「智慧」の醸成が基本にあるべきであるろうと考えます。

私たちが賢くあり、明確な決意ができ、妄想や無知ではなく現実を踏まえることができるように、智慧をもつて知識を補う必要があります。思いやりは、学習を通して世界全体のためになるように、専門化やキャリア志向という最近の教育傾向を補うために欠くことのできない大事

な徳目です。

二、道元禪師の「止むことなき実践」

（生涯にわたる教育）

私は今日、日本の曹洞禪の伝統を代表する者として、ここで禅仏教の観点から教育について述べたいと思います。

先ず「禅とは何か？」を問う必要があります。本来「禅」は中国語の「Chan」からきたもので、これは沈思黙考、瞑想を意味するサンスクリットの概念「Dhyana」を転訳したものです。日本の禅仏教は主として三大宗派に分かれています。即ち、

「栄西」(1141～1215)が開基した臨済宗、「道元」(1200～1253)を開祖とする曹洞宗、中国僧「隠元」(1592～1673)が開いた黄檗宗からなります。禅宗の真髄は次の言葉で要約することができます。「心の中を見よ、そうすれば仏

教が会得されよう」このように禅宗はこの会得につながる瞑想に重きを置いています。いわゆる禅とは我々の心が何かにこだわっている、とらわれている、そのこだわりやとらわれから心を自由に解放してやることなのです。私が属している曹洞宗は道元禪師が七六十年前に開いたものです。今日この宗派の寺院は全国に一万五千あり、最大の檀信徒を擁しております。「道元」から第四代の禪師「瑩山」が普及に勤められた結果です。以後「瑩山」も創始者とみなされ、曹洞宗には釈迦牟尼仏の教えを正しく伝えた「二人の開祖」として尊ばれているわけです。

さて、宗派の開祖「道元」の教えとして最も代表的な、最高傑作といわれるものは『正法眼蔵』です。仏陀が体現された事物の真の本質を如何に悟り、苦悩から解放されるかという実践的な方法を説いています。これは九十五巻と語

録十巻からなり、宗門の根本著作となつていま
す。原文は非常に難解とされています。原文の
一節に「仏陀の道を学ぶことは、自己を知るこ
とである。自己を知るということは、自己を忘
れることである。自己を忘れるということとは、
幾千万の事物による確認を得ることである。幾
千万による確認を得ることは自己と他者の身心
から離脱することである」といつています。『正
法眼蔵』に説かれる言葉は「智慧と思いやり」
のある真の教育というものを簡潔に表していま
す。

仏教を学ぶには先ず何よりも自己を知るこ
と、即ち、己はいつたい何者なのかを探求する
ことにあり、人は自分を探求するにつれ自分を
「忘れる」ようになる。現代に生きる自分は欲
望を満足させることが価値だと思ひ込んでい
るために、自分へのとらわれから離れないでい
る。今日の時代まさにその最中に在る。自分の欲望

にとらわれては、自己から抜け出すことはでき
ない。大事なことは「自分を忘れる」ことだと
教えている。自分の独自性と純粹性を得ようと
これまで蓄積してきた自分の知識、経験、差別
心がなくなるにまかせるようになります。自己
という牢獄から開放されると人は自然界、地球、
全宇宙（幾千万の事物）とこの瞬間に一体とな
ります。この真理の只中に生きるということは
自由になることであり、他人の自由とともに（身
心から離脱した）純粹生活の自由を経験するこ
とになります。これが真の智慧です。

「自己を忘れる」という考えは現今の若い人々
には非常に縁遠いものかもしれません。なぜな
ら、現代世界の多くの人々にとって人生は欲望
に満ちていて、自己中心の利得が人々を駆り立
てる唯一のものであるからです。けれども、そ
のような自己中心のライフスタイルは憎悪、競
争、衝突、貧困、飢え、自然破壊、そして恐ら

くは究極的な人類の没落といったことに逃れ難くつながっています。

我々は、「自分に、自分自身、そして自分」というものに固く縛られているように思えますが、実際には他人の思惑や外部の規範というものに動かされています。これこそは、道元の「自己を知る」ということなのです。重要なのは、自己を「千万の事物」や宇宙の中へ押しやるのではなく、まさに宇宙の一部であるかのような状態に自己をおいて宇宙を自然に顕現させることです。

道元にとって自己発見はただ禅の瞑想実践を通してのみ得られるというものであり、この瞑想や「只管打坐（ひたすらに坐る）」は、目的やゴールを求めて行ずる坐禅瞑想であってはならないと云う。ことごとく目的のない瞑想、自己利益を伴わない無条件の瞑想なのです。従って瞑想が啓蒙のためですらないという考えにつ

ながります。この絶対的な立場は「究極の静謐の心境」と禅の伝統において呼ばれているものです。道元はこのところを、「身心脱落」といい、「身心」は人間を形成している一切を意味し、精神の存在とその卓越性が極めて明らかにされている。言い換えれば「悟り」とは、ある精神的な力を手に入れることを示しているように思う。

例えば、この「究極の静謐の心境」は最も単純な行為に現れます。実際に汚れているようにといまいと習慣的に洗うとか、当地タイ国で行われているように他人と挨拶を交わすときに敬意のしるしとして両手を合わせる、といったことはすべてそのような心の表現なのです。両掌を合わせるという行為は、日本では何かを祈念した時、あるいは神社仏閣等を訪れ、うやうやしく手を合わせます。この手を合わせるという習慣は素晴らしいことです。しかしながら今日、



清水寺森清範猷下と

日本の若い人の間では、次第に見られなくなりました。淋しいことです。

この「究極的静謐の心」と「禅瞑想の実践」は道元の教える仏法と人間の問題であり重要な二本柱です。道元が意図した無条件の形で瞑想を實踐するなら、その形自体が仏陀の姿です。そこには豊かな智慧と全ての事物の本質に対する明哲な洞察力をもつこととなります。瞑想の精神を持続的に実践するという性質が大切なのです。ものを食べるときは、ただ食べればよいのです。食べ物の栄養とか健康上の価値とか味を考えるのではなく、ただ食べるのです。飲み物を飲むときも、それがお茶であればそのお茶の味のよしあしとか、お茶を飲む行為が心を癒したり何かのためになるとかといった余分なことを付け加えずに、ただその瞬間に没入して飲むことに専心すべきなのです。これが「いまここ」ということなのです。

道元が中国で修行中でのこと、彼はある寺を訪ねました。非常に暑い日でした。堂を連ねた中庭に一人の老僧侶が椎茸を干しています。灼熱のもと汗まみれになり、熱い石台に椎茸を一個一個取り出して丁寧に並べていました。彼は寺の料理長（典座）でした。道元は見るがまま出し抜けに「貴方のような尊いお方がどうしてこのきつい仕事を若い僧侶にさせないのでか」と問います。老僧は笑みを浮かべながら答えました。「他人の仕事は私の仕事ではありません」。道元はなおも「でもご自分の健康を考えると、この炎天下なぜ一休みしないのですか」。これに対し「この瞬間は今ここにしかありません」と老僧が答えたとき、道元はショックを受け、愕然としました。青年僧道元にとっては思いもかけない通棒だったのでしょう。このことは言い換えれば、過去は決して取り戻せない。あたかも不確かな未来はひびの入った湯

呑がいつどのように割れるかという不確かさと同じように知り得ないのです。現実の確かなこととは「いまここ」にしかないので。老僧が自分の健康のことや暑さのことなどに全く無関心に、ひたすらあるがままのいまの瞬間に心を尽くしていることを道元は実感しました。老僧の実践が実に禅の瞑想実践と少しも違いがないことを理解するに至りました。いまここにひたむきに生きるという実践は誰もが日々の生活を人間らしく生き抜くことのできる智慧なのです。「究極の静謐の心」とは自然にあるがまま自由に生き、障害物もなく諸々の欲望に負けることもなく、また卑下することもない、思いやりの心をもって、誰に対しても優しい言葉で話しかけ、他人のためになることをよるこび、感謝しつつ唯類々と奉仕の念に満たされるという在り方なのです。

私たちが今日痛切に必要としているのは、「智

慧と思いやり」の心であり、生活上の一体化なのです。この実践は継続的になされる「仏教心による不断の実践」（日本語で「行事」）であります。この意味するところは日々の生活は瞑想であるということ。或いは、私たちの目の前にある世界は、それがなんであれ、私たちが仏教の実践に身をゆだねることのできる修行の寺院である、ということ。言い換えると、真の教育はただ大学の教室での形式的な教育だけでなく、また、大学在学中の年月に限られたものでもなく、「止むことがない」ということなのです。年齢を問わず、どこに居ようと（家庭・職場等々）仏教徒の生活は仏道実践の場なのです。

三、正しい生活

道元が海路中国に着いたのは一二三三年。しばらく停泊する船に留まって語学の習得に取り

組みます。そんな頃、ひとりの老僧が舟に椎茸を買いにやってきた。道元にとっては、初めて見る彼の国の僧侶です。自室に請じてお茶をふるまう。道元は、僧院には料理する他の僧侶もいるはずだと考え、しばらくゆっくりしてゆくように頼みます。先に言いましたように彼は Ayuwang 山（愛育王山）の料理長だったので。椎茸を買うために僧院から舟まで一日がかりの距離を徒歩でやってきた。老僧は料理長としての職務から脇道へそれることを拒んだのです。あなたのような尊いお方が、瞑想や公案研究に打ち込まず、なぜ他の僧侶のために未だ料理をしているのかと問う、「外国の人よ、未だ弁道を解せず、未だ文字を知り得ず」と。道元は自分の未熟さに気づき、更に問う「如何があらんかこれ文字、如何があらんかこれ弁道」。しかし老典座は応えず、解かねばわが寺へ来い、と。この経験は、道元の記憶に生々しく残り、

一三三七年に完成した彼の『典座教訓』（料理人向け指導書）に記録されています。このマニュアルは、僧院料理人が他の修道僧たちに食事を与える正しい方法について道元が記したものです。同時に料理を通して他人の肉体の栄養補給のみならず精神の安寧のためにも責任を持つ料理長に要求される態度にも言及されています。『典座教訓』によれば、手に入る材料がどのようなものであれ、可能な限り最善の食事を作ることが料理人の務めである、とあります。今日この洞察が日本の食文化の原点になっています。茶道も然りです。

仏教の精神性には、意識の実践において見出された「洞察と思いやり」の質を以って世界と係わりあう能力と瞑想の内的規律とが共に含まれます。故に「禅の料理人」になるために学ぶことは、自分の性癖から自分が生きている社会環境に至るまでのあらゆるものを含めて人生に

存在する「材料」に光を投げかけることを意味します。「材料」に対するこの注意関心は、人生自体の糧を提供するために、即ち、世界と精神的に係わりあうために、これらの原材料を巧みに使うことができるようになった出発点なのです。

自己を発見する課程において、世界との係わり合いは、キリスト教における職業あるいは天職の考えに相当するもの、即ち、仏教でいう「正しい生活」の概念で理解されるものにつながります。正しい生活というのは、世の中で正しく身を処する在り方として、いかにして暮らしていくかという点に関し仏陀が示した伝統的仏教の八重の道、第五番目の輻（や）なのです。仏教の実践は、全体として仏教の教義によって導かれる仕事や生涯職として、自己の経済的な生計に反映するための信仰治療者を必要とします。生涯職での成功とか金儲けが唯一最大の目

的であるような教育モデルではなく、仏教徒としての教育への取り組み態度は、この精神、道徳的領域を包摂するものでなければなりません。

伝統的に仏教経典においては、正しい生活というものは、仏教の第一義を犯すという理由から生命を奪うことを認めていない。したがって仏教の道は究極的には苦悩の軽減にかかわるものであることから、積極的には、あらゆる存在物の生命を良くすることに役立つ生涯職を選ぶべきことを意味します。仏教は限りなく「生活の全て」、人間としての生き方即ち処世術として考慮すべきものと心得ます。この道は努力すべきある種の抽象的な理想というよりは、むしろ人が持つて生まれた素材を「調理」することから生まれてくる人の道なのです。生得天賦の才能が何であれ、それを自分とこの世との係わり合いにおいて如何に正しく表現するかという

ことです。即ちこれが仏教への説得力なのです。

このように真の教育というものは仏教界のあらゆる区分を越え、また他の諸宗教伝統の間を突き抜けて伸びる道であります。それは智慧や思いやりと融け合い、自己の真の性質やこの世の苦悩の軽減のために捧げられる全体的な学問観なのです。真の世界平和を実現し、地球と調和し、希望の光を未来に輝かせるもの、それは「仏教に根ざした真の教育」というこの精神なのです。

この論文は、黒田老師が二〇〇四年九月 米国ハーバード大学で行う予定だった講演会の予定稿です。

開山忌並びに 第二十九回育英会辞令交付式

善光寺開山忌、並びに第二十九回の横浜善光寺留学僧育英会辞令交付式が平成二十八年二月十二日午後二時から、釈迦殿で執り行われ、育英生に採用された中国からの留学生、花菜さん(34)に、育英会理事長の黒田博志住職から辞令、育英金と記念品が授与されました。

初めに開山・棟庵白純大和尚と二世中興大圓武志大和尚の追善法要が本寺の大田原市・光真寺ご住職、黒田泰弘老師を焼香師にお迎えして営まれ、関係のご寺院、総代をはじめ檀信徒の方々が読経・焼香しました。

引き続き辞令交付式に移り、育英会理事の安

藤嘉則老師(駒沢女子大学教授)が選定経過を報告しました。内モンゴル出身の花さんは、平成十五年に同朋大学に入学し、昨年三月に博士号を取得。近年はモンゴルにおける女性の信仰などについて研究しています。

安藤理事は「日本に来て様々な言語を学ぶうちにモンゴル人にとつての仏教とは何かということに目覚めた。今後とも日本で研鑽したものを世界に発信してほしい」と激励しました。

黒田住職の導師により育英会報告諷経が営まれ、辞令交付の後、花さんは「仏教の知識はまだ浅いが、これからも精一杯努力していきたい」と決意を込めて感謝の言葉を述べました。

開山忌の焼香師を務めた光真寺の黒田泰弘老師は「今年には先住様の十三回忌正當の年。皆さんが力を合わせて世界平和に向けて活動されている姿はまことに麗しい」と善光寺のさらなる発展を願い、益々の活躍に期待を寄せました。



辞令と記念品を手に 花栄さん



黒田住職は「私も師匠の『尽くして、尽くして、尽くし抜け』の言葉を胸に日々精進している最中です。世のため世界平和のために役立つよう邁進して参ります」と挨拶した。

■海外留学僧育英会について

《曹洞宗神奈川県第二宗務所発行『所のたより』掲載（平成二十八年九月）》

育英会は善光寺の使命であり、理念

善光寺住職 黒田博志

善光寺では「横浜善光寺留学僧育英会」を檀信徒の皆様のご理解・ご協力のもとに行っております。この会は一九八四年に開創十五年を記念して師父大圓武志大和尚が設立。当時つぎのように育英会の設立趣意が示されております。

『いまや、人類は宇宙時代に入り、時間的にも空間的にもその距離は著しく短縮され、世界はあたかも一国の観を呈しております。反面人類はかつてない民族、宗教、イデオロギー、地球環境破壊、さらには恐慌に晒され、不安と絶

望の危機に見舞われております。これは明らかに現代社会の悲劇であり解決の糸口さえ見つからないでいるのです。

翻って今日ほど仏陀釈尊の教法宣布を必要とするときはありません。しかるにわが国は、世界最大の仏教国でありながら、仏教界は遺憾ながら世界の大勢に即応、教化の実を挙げる態勢に欠けているように思います。世界の中の日本、日本の中の仏教、仏教と私、その自分の存在を認識するとき唯あぐねているだけでは罪が深すぎます。

この時代に及んで私を省みて「どうする、どうしたらいい」。寺の開創時、私の信念は一体なんだったのか煩悶する。日本の仏教は社会参加、社会貢献、実践力に欠けているという、世界の非難を私は敢えて率直に甘受する。いま脚下を反省、懺悔しながらその使命と責任を果たすべく、開創時の原点基本に立ち還り出来ることを今やる。

しかし身辺を見ますと横浜の小さな寺、所詮、大は望めない。実現するには、「派遣の費用、いわゆる資金が必要」なんとしても多くの協力者が必要です。それも一年ではなく長期に亘りご協力ご支援が必要なのです。

一銭一草一口減らしを提唱し応えていただいたのです。それでもひとりでやれることは、あまりにも小さく限りある。だから衆知を集める必要がある。幸い趣意に賛同した檀家、檀信徒各方面から強力なご支援とご浄財が寄せられ設

立、漸く派遣できる目処が立ちました。

はかつて自らの信念に駆り立てられ、大本山永平寺僧堂安居を修し、その足で仏舍利奉拝日本一周行脚を敢行、さらには仏教の原点、インドに赴き仏蹟を巡拝、帰途タイバンコクに上座部仏教比丘として、九旬安居を修し、さらに渡米、ロスアンゼルス禅センターで二年間欧米人に開教師として参禅教化に努める。

この間いただいた尊い仏縁がその後の私の生き方と人間形成の土台となったことを覚えます。この尊い仏縁を若い人々にも経験してもらいたい。そして機会提供に精進したいという念願、それこそが私の育英会設立の根源であり、基本の動機目的であります。

仏天のご加護により「法輪転ずるところ、食輪おのずから転ぜられる」の教えに従い、海外留学僧派遣も制度として善光寺自力以って軌道にのせることができました」

と経緯、その趣旨を述べております。

以来師父は遷化するその年まで、実に二十一年間、一年と欠くることなく派遣と海外からの受け入れを行い、延べ百十六名に及ぶ留学僧の方々とご縁を結びました。いまや育英生の雄飛は世界規模となり、各国各界で大活躍しています。

二〇〇四年に師父遷化前、病床において、「いいか、博志。育英会は善光寺の使命であり、支柱である。お前の代になっても限りなく続けて欲しい。たとえ一人でもいい、頼むぞ」との言葉。

遷化後三年間、止む無く休会としておりましたが、檀信徒の方々をはじめ、留学僧の方々より再開を強く求められ、諸老師、諸先輩方、関係の皆様方に支えられ助けられて二〇〇八年に再開することが出来ました。再開後八年を経過し更に十四名の方々とご縁を結ぶ事が出来まし

た。(関係国二十四カ国二地域)

私自身は甚だ力不足で有りますが、師父が繋いでくださったご縁の方々のお陰で来年、育英会は三十回を迎えます。

この期に、宗務所さまより掲載のお話を賜りました。これも何かの導きかと受け止め恐縮ながら会の設立趣意を振り返り掲載させて頂きました。

今後とも所内の各諸老師方、諸先輩、青年会の皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



横浜善光寺留学僧育英会 採用育英生 集計

全130件（育英生全113名・継続16名・再1名）

関係国全24ヶ国及び2地域

2016.05.20現在

●派遣先16ヶ国（含日本）及び1地域

国名		大学名・施設名/育英生(敬称略)	新規	継続	合計
アジア	タイ	ワットパクナム	15	2	17
		ワットサラディーン	1	0	1
	インド	マハチュラロンコン仏教大学	1	0	1
		カルカッタ大学	3	3	6
		マイソール大学	1	0	1
		プーナ大学	2	0	2
		マドラス大学	1	0	1
		デリー大学	1	0	1
	スリランカ	ケラニア大学	2	1	3
		オープン大学	1	0	1
	カンボジア	ナロム寺院	0	1	1
韓国	東国大学	1	0	1	
台湾	ファクワング研究所	1	0	1	
南アメリカ	ブラジル	参玄禅堂(ポルトアレグレ)	1	0	1
		新設禅センター	1	0	1
北アメリカ	アメリカ	ロサンゼルス禅センター	10	2	12
		ミネソタ禅センター	1	0	1
		ニューヨーク禅センター	3	1	4
		バレー禅堂	1	0	1
		禅マウンテンセンター	1	0	1
		カリフォルニア大学	1	0	1
		スタンフォード大学	1	0	1
ヨーロッパ	イギリス	オックスフォード大学	1	0	1
		ケンブリッジ大学	2	1	3
		ロンドン大学	1	0	1
	デンマーク	ライブチヒ大学	1	0	1
	ドイツ	ハンブルグ大学	2	0	2
		ライデン大学	1	0	1
	オランダ				
	イタリア	各所	1	0	1
	フランス				
	スイス	ローザンヌ大学	1	0	1
オーストリア	ウィーン大学	1	0	1	

国名	大学名・施設名/育英生(敬称略)	新規	継続	合計
日本	駒澤大学	11	1	12
	愛知学院大学	9	0	9
	立正大学	6	0	6
	大正大学	2	1	3
	花園大学	3	0	3
	東京大学	4	1	5
	東洋大学	1	1	2
	仏教大学	1	0	1
	龍谷大学	1	0	1
	東北大学	1	0	1
	上智大学	1	0	1
	京都大学	1	0	1
	麗澤大学	2	0	2
	大菩薩禅堂	1	1	2
	大雄山最乗寺	1	0	1
	金沢大学	2	0	2
	京都万福寺	1	0	1
	武蔵野大学	1	0	1
	南山大学	1	0	1
	同朋大学	1	0	1
その他	1	1	2	
合計	約50ヶ所	113	17	130

●育英生国籍 17ヶ国（含日本）及び2地域

アゼルバイジャン、バングラディッシュ、ブータン、
ウイグル自治区、ベトナム、スリランカ、日本、インドネシア、
マレーシア、ネパール、中国、タイ、韓国、台湾、アメリカ、
ブラジル、ポーランド、ドイツ、フランス

〔目的〕

仏教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1. Zen Center of Los Angeles (LA 禅センター)
"923 S.Normandy Ave., LA., CA90006U.S.A"
2. Zen Mountain Center of NewYork (NY 禅センター)
"Box197,Mt.Tramper,NY12547U.S.A"
3. Zen-Zentrum Eisenbuch (アイゼンバッハ・禅センター)
"Eisenbuch 7 D-84567Erlbach Deutchland Germany"
4. WatPaknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand"
5. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成29年4月より1年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1. 論文（次項による）
 - 論題
 - ①これからの国際興隆と仏教の役割
 - ②世界平和と仏教徒の誓願
 - ③留学僧として私はこれを学びたい
 - ④異文化の中で仏教を学ぶいずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿
用紙5枚以上（A4判タテ書き）
2. 保証人と連署した願書 3. 卒業証明書
4. 履歴書 5. 推薦書 6. 健康診断書

〔募集人数〕

平成29年度若干名

平成28年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成29年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒234-0053 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第 30 回 生

横浜善光寺 留学僧募集

平成29年度・2017

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

一 齊法要のご報告

〔平成二十八年〕

○新年祈祷会 平成二十八年一月九日

昨年引き続き、今年も熊谷豊太郎筆頭総代のご挨拶から一年のスタートが切られました。



戦中戦後、波乱の時代を生きた百歳翁が語る一言一言の重みは、聞く人の心を揺さぶりました。

平和の有り難さ、
平穏な日々の嬉しさ
……全てが当たり前
ではないと実感させ
られました。

ニ ュ ー ス ・ ア ラ カ ル ト



不平や不満を口にする事を控え、感謝の言葉で生きる事が長生きのコツではないかとお話を頂きました。

○節分追儺式法会 二月三日

今年の節分追儺式法会は盛りだくさんの内容で修められ、嬉しい立春のお迎えを致しました。節分のご祈祷に先立ち、前日奉納された賓頭盧尊者（おびんずるさま）像の「点眼式」を勤修。

引き続き、転読大般若法要にて檀信徒各家の除難招福をご祈禱申しあげました。その後はお楽しみ「奉納演芸」が納められました。

最初に幫間（ほうかん）芸の悠玄亭玉八（ゆうげんてい たまはち）師匠が、伏見総代の紹介で登場。「笑う門には福来る」、賑やかに春を迎えようとの趣旨でお招き致しました。幫間とは、玉八師匠曰く「又の呼名を太鼓持ち、男芸者と言えば少し分り易いでしょうか。読んで字のごとく、『間をたすける』。即ち客と芸者の間

— ニュース・アラカルト —

をとりもち、芸で間をつなぐ宴席の盛り上げ役」
「戦後は、全国に五百人程がいたといわれているが現在は東京浅草見番に所属する四人が伝統の芸を伝えている」（玉八師匠のホームページより）。滅多にお目にかかれない芸に、皆様興味津々。笑っている間に四十分、あつと言う間に過ぎてしまいました。

続いては獅子舞の出番。お檀家の保田様のご縁で実現しました。

獅子舞は、力強く舞う姿で魔を祓い、大きな口で噛まれると人についている邪気を食べてくれると言われます。病気や悪いことから身を護ってくれる縁起ものとして親しまれています。
奉納演芸の後には、お待ちかねの「豆まき」。獅子舞も登場しての賑やかな豆まきとなりました。





川島囃子保存会 ホームページより

【川島囃子(ばやし)】は横浜市保土ヶ谷区、川島地区に古くから伝わる郷土芸能。江戸時代後期から実に二百年以上も脈々と受け継がれ、一九八〇年に横浜市初の無形文化財に認定。

太鼓や鉦(かね)、それに唯一のメロディを奏でる笛に併せて、コミカルな動きをみせる「おかめ」「ひよっこ」「笑面」という五人で構成されるのが、川島囃子の基本スタイル。

楽しい動きで笑いを誘うその演技は、今や祝宴には欠かせぬ存在として区民に親しまれているが、元々は農業の豊作を祈念して始まった由緒ある伝統芸能で、区内にも保存会が幾つか存在している。

特に川島囃子保存会(三村守会長)のメンバーは全員が川島町在住で、文字通り「地元」の文化を守り、古代から受け継ぐ独特の「間」にも一切アレンジを加えず忠実に再現。各方面から高い評価を受け、横浜市の無形文化財指定をはじめ、海外公演を成功させるなど幅広く活躍している。

○春彼岸法会 三月十八日

法話 大本山永平寺別院長谷寺参事兼悦事

静岡 保春寺副住職 勝田岳芳師

大本山永平寺にて七年間の修行を了え、現在は永平寺別院にて修行者の指導にあたる勝田岳芳師。昨年までは週末を中心に善光寺でお手伝いして下さっていました。

自己中心的な我見を捨てて、仏法僧の三宝を拠り所にするという仏教徒のあるべき姿を、永平寺修行中に派遣されたヨーロッパ海外研修での出来事を交えご法話下さいました。

坐禅修行を中心とした研修期間にて、老師から戴いた励ましの言葉や、世界中から純粹に仏道を求めて集まる修行者の姿勢に感銘を受けたそうです。至らぬ自分に気付き、転じていく真摯な姿、丁寧にわかりやすく伝える法話に参列者の方も深く感動していた様子でした。

— ニュース・アラカルト —



○五蘭盆施食法会 六月二十四日、二十五日

法話 当山住職

五月の旅行で訪れた清水寺森清範猊下のお話を紹介。「見える命は、見えないいのちに支えられている」、お盆の行持はそれに気づき感謝できる行持です。共によいお盆をお迎え致します。



— ニュース・アラカルト —

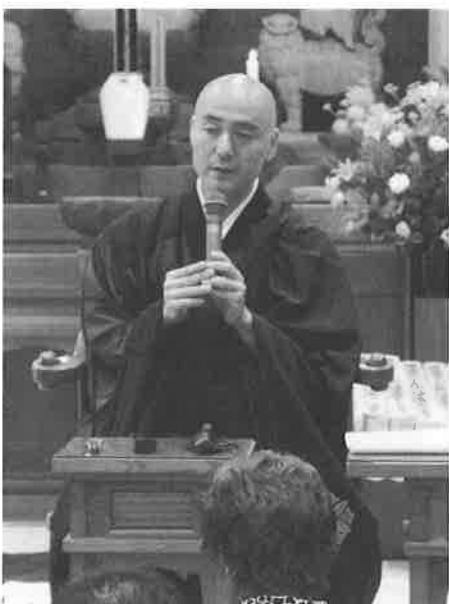
○秋彼岸法会 九月二十日

法話 大本山永平寺別院長谷寺知客

山梨長泉寺住職 水庭浩章師

「人生はパーフェクトです」……色々あってもその覚悟を持って人生に答えを出していく。力強いご法話に皆真剣な眼差しで受け止めていました。

(水庭師の法話は36ページをご覧ください)



○身代り不動明王大祭 大般若祈祷法会

五月二十八日

ご祈祷前に米陀光総代の婚約者、千葉麻美様によるフルート演奏が行われました。

「アマポーラ」や「上を向いて歩こう」など一度は耳にした事のあるメロディーを三十分程度演奏、最後に「愛の賛歌」、リクエストとして「マイウエイ」など先代方丈様の好きだった曲が流れるとまさに本堂に先代方丈様が顕れたような感覚を覚えました。



優しい音色
が心にしみわ
たるひととき
でした。

— ニュース・アラカルト —





山内整備進む

○成寿堂・成寿庵完成

梅嘉庵より不動殿に到る土地に新たな庫裏が建設されました。

「成寿堂」と名付けられた一階部分には檀信徒並びに有縁の方々よりご寄進頂いた絵画や掛軸、壺などを収蔵致しました。

これまでは山内各所に置いていたものを一箇所に集め空調が整った場所で保管致します。二階は庫裏となります。

— ニュース・アラカルト —



○道標が建ちました

大駐車場の一角に「善光寺参道」と彫刻された大きな石碑が建立しました。この石碑は昨年逝去された鳥居秀行総代が発願されたもので、氏亡き後ご子息の悟氏がその遺志を受け継ぎ建立されました。

御岳山の黒光真石（こっこうまいし）に、京都清水寺森清範猊下に御揮毫頂きました。

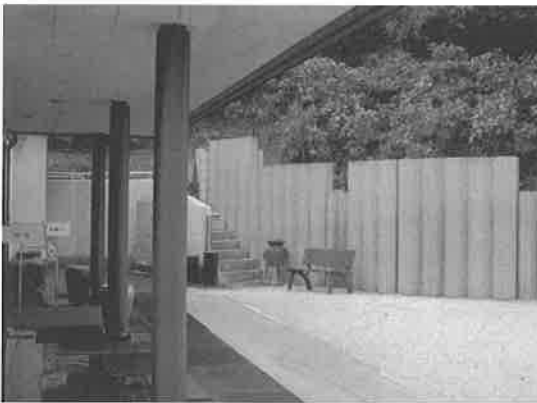
鎌倉街道より善光寺へ登ってくる道の途中に大きな道標が出来ました。

○駐車場整備

道標の建つ大駐車場の隣、米陀石材店の右斜め向いに新しく駐車場を整備しました。十七台分の駐車スペースがあります。どうぞご利用下さい。

尚、釈迦殿前のスペースは荷物の積み下ろしや御足の不自由な方の乗り降りの際にご利用い

— ニュース・アラカルト —



○釈迦殿前庭整備

ただき、法要など長時間の駐車は出来るだけ大駐車場のご利用をお願い致します。

山桜や紫陽花の花が咲く釈迦殿脇の山に土留め工事を行いました。

大きな石柱を地元石材店の皆さまよりご寄進頂きました。

漢詩講座

四月から八月にかけて全九回にわたり小田原成願寺住職山口晴通老師を講師にお迎えし漢詩講座を開講致しました。

「平仄（ひょうそく）」などの漢詩の基礎から丁寧にご指導頂き、唐詩のみならず頼山陽や江馬細香など日本の漢詩も多くご紹介頂きました。また良寛さんについては特に親しくお話をして下さいました。

日本はもとより世界各地を旅された話や、漢詩の背景にまつわる話など楽しく有意義な講義を頂きました。ありがとうございました。

— ニュース・アラカルト —



無底会会場

四月十三日と六月六日に無底会（会長吉岡博道老師）による詩偈の勉強会が開催されました。大智禪師六五〇回忌に併せて大智禪師偈頌を勉強する会として発足した無底会は主に関東各県の曹洞宗寺院を巡り学びを深めております。

今回は会員の戸澤洋太師と種井英雄師が善光寺に随身しているご縁から善光寺での開催となりました。

善光寺拝登惣先師

吉岡 博道

相承鉢盂活機禪

朝夕結眉五十年

下野水滌日野澗

滴流繁衍順方圓

ニュース・アラカルト

梅花流詠讚歌 師範会会場

九月十二日、神奈川県第二宗務所梅花流詠讚歌師範会・初心者講習会が善光寺を会場にして行われました。

梅花流詠讚歌とは……

人は幸せを願って生きています。しかし、誰しも悩み、悲しみ、苦しみを体験しない人はいないでしょう。そうした時に心を支えてくれるのが、「梅花流詠讚歌」です。その歌詞には私たちが安らぎの世界へと導いてくださる仏さまの教え、想いが示されています。

一人では出来ないことも、多くの人々と共に学び、励むことによって楽しみになり、充実した人生を歩むことができます。現在全国各地十六万人の方々が梅花流詠讚歌に親しんでいます。

事をご報告申し上げます。

善光寺青年会

善光寺開創以来青年会会長をお務め頂いていた山口義男総代に代わり鳥居悟総代が青年会会長に就任致しました。九月六日の総代会にて承認され委嘱状が付与されました。

開創以来四十六年の長きに渡って青年会会長をお務め頂いた山口総代は「先代方丈に言われて二つ返事で青年会長を受けましたが、会長を辞めるといわれる前に先代が亡くなってしまっこの年まで青年会長を務めてしまいました。や」と若い世代に引き継ぎが出来てほっとしています。や

いつも若々しく青年といわれてもおかしくない容姿の山口総代。今後は青年会終身名誉会長

ニュース・アラカルト

となります。

鳥居悟新青年会会長は地元の鳥居石材店社長。若い感覚で新しい青年会の活動を企画したいと抱負を語られております。益々、檀信徒の皆様が集えるお寺を目指して寺檀共に活動して参りたいと思います。

種井英雄師ご結婚

五月四日、愛知県岡崎市興圓寺副住職・種井英雄師と智美さんが仏縁熟し結婚いたしました。種井師は金沢大乘寺での修行後平成二十三年より善光寺に務めております。

ご法事の他、平日は横浜やすらぎの郷霊園にて園内の清掃整備を主に担当しております。種井師の益々のご活躍と末永いお幸せを祈念申し上げます。

ボーイスカウト坐禅会

二月十四日（日）、毎年恒例のボーイスカウト坐禅会が、釈迦殿で行われました。

今年も早朝、冷え込む中に元気な少年、少女、青年そして付き添いの保護者の方々、八十名余が来山。一緒に坐禅致しました。

三十年以上も継続してきた坐禅会です。団体や企業の研修坐禅会も承ります。詳しくはご相談下さい。

ニュース・アラカルト



善光寺霊園ニユース

横浜やすらぎの郷霊園

◇正門球体モニュメント

霊園正門花壇に大きな赤い球体モニュメントがあります。

この春、モニュメントに『大安心地（だいあんじんち）』と彫刻された石板が取り付けられました。『大いに心安らぐ地』また『安心の大地』という趣旨です。

横浜やすらぎの郷霊園は豊かな自然のもと、お墓参りにこられた方もお墓で眠る御霊も共に安らかな心となる大地。赤い球体は融通無礙（ゆうづうむげ）な滞りなく角のない『まあるい心』



を表しています。

何時お墓参りに来ても、『ほっとする』と言える場所。そして『また来るね』と御霊に声をかけて帰られる場所。皆様方の温かいお気持ち
が、やすらぎの郷霊園の空気を作っています。

どうぞ心やすらかにお参り下さい。

※安心を仏教的には『あんじん』と読みます。

◇善光寺萬霊塔 『やすらぎの塔』

墓地継承のご相談が多く寄せられる中、善光寺では永代供養墓を建立して対応しております。

『やすらぎの碑』では、地下に納骨室を設け骨壺のままお遺骨をご安置致します。

『やすらぎの塔』では、骨壺のままご安置する期間を経過した御霊を自然にお戻し致します。

直接、『やすらぎの塔』へ埋骨する方も増えてきました。今年の合同合祀慰霊祭には、四十名を越える縁者が参列し、二十五霊の御霊を合祀致しました。「お墓の事をどうしたらよいか悩んでいたんです。ずっと心に引っかかっていただけ、これで安心しました。肩の荷が下りました」とおっしゃられる方。合祀後、皆さま、



お盆やお彼岸にお墓参りに来られます。「合同のお墓はちょっと淋しい感じがして……」と、いった昔の印象とは異なり、供花が絶えない明るい雰囲気、永代供養墓となっております。

◇園内のリフトが 使い易くなりました

墓域内の階段に設置しておりますリフト（椅子型昇降機）の機種を入替致しました。旧機種の製造終了・部品の供給停止に伴う入替です。以前より座高が低くなり、乗り降りし易くなりました。

事故防止の為に鍵をかけてありますが、ご利用の方はお気軽に管理事務所にお声かけ下さ



い。「楽ちゃん号」と言います。その名の通り楽ちんですよ。

◇お釈迦さまがテレビに

テレビ朝日系バラエティ番組のアメトーク（平成二十八年九月八日放映）にて芸人・小籾千豊さんの『若者にもっと四月八日を広めた』という企画で、やすらぎの郷霊園の花御堂とお釈迦さま（誕生佛）の写真が使用されテレビで放映されました。

ホームページを見ていて、華やかな花まつりのイメージにピッタリなので、写真を使わせて欲しいとの事でした。四月八日は、お釈迦さまのお誕生日。仏教の素晴らしさをおもしろ・おもしろ紹介し、『クリスマスだけではなく、毎年この日を家族や大切な人に感謝する日にしたい』と話されていました。

やすらぎの郷霊園では桜満開の頃、毎年四月八日を挟む週末に『花まつり』を行っております。花御堂をお花で飾り付け、お釈迦さま（誕生佛）に甘茶を灌いでお参りをします。

お誕生佛とは、お釈迦さまがお生まれになつて七歩あるき、右手で天を指差し、左手で大地を指差し『天上天下唯我独尊』と示されたという逸話がもとになっております。独尊とはかけがえの無い尊い存在であるという意味。

全ての命が、かけがえのない尊い命。私の命も、あなたの命も、あの人の命もかけがえのない命。



また、甘茶を灌いでお参りする由来は、お釈迦さまがお生まれになった時に天が歓び、『甘



露の雨』を降らせ、地上にある全てが誕生を歓んだという逸話からです。

◇やすらぎ通信

昨年に引き続き、薬剤師の井上裕之先生（昭和堂薬局社長）によるコラムを連載致しました。

東洋医学のものさしである陰陽や季節の養生法を通じて五臓（五行学説）等の話題を、生活に沿った内容で説明して下さいました。

◇ やすらぎ寺子屋

毎月第一日曜日の午後二時から管理事務所の二階にて椅子坐禅と法話を行っております。

坐禅を体験してみたいけれど「足が痛いからとても無理だ」「身体が硬いから無理よ」と思われている方々に椅子坐禅をお勧め致します。

坐禅の姿勢や呼吸など初心者にも解り易く説明致します。『気づき』を保ち穏やかな心で日々の生活を送る智慧を共に学んでおります。副住職が担当しておりますが、寺の都合により担当が代わる月もあります。

今年度は善光寺で長くお手伝い頂いている熊田慧照老師(三高松岩院住職)によるお話もありました。発心し出家してより全国各地の道場で修行された体験談や坐禅について多岐に渡る話題を厳しくも面白くお話しして下さいました。

法話の後には、お茶を飲みながら座談会です。

その時々ニュースなども話題になります。今年一月には、昨年十一月に起きたパリ同時多発テロで妻を亡くしたフランス人ジャーナリストのアントワーヌ・レリスさん(34)のフェイスブック(朝日新聞十一月二十日より)などを紹介し、「怒り」について考えました。

『君たちに私の憎しみはあげない』

金曜日の夜、君たちは素晴らしい人の命を奪った。私の最愛の人であり、息子の母親だった。でも君たちを憎むつもりはない。君たちが誰かも知らないし、知りたくもない。君たちは死んだ魂だ。君たちは神の名において無差別な殺戮をした。もし神が自らの姿に似せて我々人間をつくったのだとしたら、妻の体に撃ち込まれた銃弾の一つ一つは神の心の傷となっているだろう。

だから、決して君たちに憎しみという贈り物

はあげない。君たちの望み通りに怒りで応じることは、君たちと同じ無知に屈することになる。君たちは、私が恐れ、隣人を疑いの目で見つめ、安全のために自由を犠牲にすることを望んだ。だが、君たちの負けだ。(私という)プレーヤーはまだここにいます。

今朝、ついに妻と再会した。何日も待ち続けた末に。彼女は金曜の夜に出かけた時のまま、そして私が恋に落ちた十二年以上前と同じように美しかった。もちろん悲しみに打ちのめされている。君たちの小さな勝利を認めよう。でもそれはごくわずかな時間だけだ。妻はいつも私たちとともにあり、再び巡り合うだろう。君たちが決してたどり着けない自由な魂たちの天国で。

私と息子は二人になった。でも世界中の軍隊よりも強い。そして君たちのために割く時間はこれ以上ない。昼寝から目覚めたメルビル(息

子)のところに行かなければいけない。彼は生後十七ヶ月で、いつものようにおやつを食べ、私たちはいつものように遊ぶ。そして幼い彼の人生が幸せで自由であり続けることが君たちを辱めるだろう。彼の憎しみを勝ち取ることもないのだから。

荒々しき言葉を語りて
愚かなる者は勝てりと思う。
されど誠の勝利は良く
堪忍を知る人のものなり。
怒る者に怒り返すはさらに
悪しき事を重ねるなり。
怒る者に怒り返さずして
二つの勝利は得られるなり。
他の怒れるを知りて正念に己を知りうる者
は己の為にまた他の為に良く利益をこうむ
るなり。

(阿含経)

目を閉じて、じっと我慢。

怒ったら、怒鳴ったら終わり。

それは祈りに近い。

憎むは人の業にあらず、

裁きは神の領域。

そう教えてくれたのはアラブの兄弟たちだった。

(後藤健二さんのツイッターより)

怒らないことによつて怒りにうち勝て。善い事によつて悪い事にうち勝て。わかち合う事によつて物惜しみにうち勝て。真実によつて虚言の人にうち勝て

(ダンマパダ223)





毎月の催事

坐禅会

善光寺では毎月第一日曜日の早朝六時から、第四日曜日午後二時から坐禅会を行っております。

早朝坐禅の後は、朝のお勤めをし、その後、禅寺の作法に従って、お粥を召し上がっていただきます。

午後の坐禅会は、坐禅を二炷。そして、読経・法話。

これまでに坐禅の経験のない方、初心者の方のご参加もお待ちしております。お気軽にご参加下さい。



平成29年 善光寺坐禅会 年間予定表

■早朝参禅会 毎月第1日曜日 朝6時から

※1月8日(日)	7月2日(日)	午前 5:45 集合 6:00~ 坐禅・読経 7:30~ 朝食(お粥) 8:30 解散
2月5日(日)	8月6日(日)	
3月5日(日)	9月3日(日)	
4月2日(日)	10月1日(日)	
5月7日(日)	11月5日(日)	
6月4日(日)	12月3日(日)	

※1月は第2日曜開催です。

早朝参禅会参加ご希望の方は、前日午後7時までにご連絡下さい。

■日曜坐禅会 毎月第4日曜日 午後2時から

1月22日(日)	7月23日(日)	午後 2:00~ 準備・指導 2:20~ 坐禅 3:00~ 経行・小休 3:10~ 坐禅 4:00 解散
2月26日(日)	8月27日(日)	
3月26日(日)	9月24日(日)	
4月23日(日)	10月22日(日)	
※5月21日(日)	11月26日(日)	
6月25日(日)	12月24日(日)	

※5月は第3日曜開催です。

参禅ご希望の方はご連絡下さい。当日でも結構です。

■朝いち禅 毎週月曜日～金曜日 午前6時30分から7時30分迄、坐禅と読経
禅寺の朝は、坐禅と読経から始まります。「朝いち禅」はお坊さんと共にお勤めする朝一番の修行です。

それぞれ日程は寺の行事によって変更があります。

服装は、ゆったりとしたもの、靴下は履きません。

時計やアクセサリーは、はずして下さい。

参加費はすべて無料です。

写経会

お写経は、自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の追善、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。

善光寺では月一回、左記にて「写経会」を開催中です。

どうぞご参加ください。

【日時】 毎月第四金曜日

午後二時より一時間半

【場所】 善光寺不動殿

【読経】 「般若心経」を全員で看読

【写経】 引き続きお写経「般若心経」

【指導】 永島南翠先生

【費用】 無料

平成29年

善光寺写経会年間予定表

1月27日（金）	7月28日（金）
2月24日（金）	8月25日（金）
3月24日（金）	9月22日（金）
4月28日（金）	10月27日（金）
5月26日（金）	11月24日（金）
6月はお休み	12月22日（金）
午後 2：00～ 読経「般若心経」 2：10～ 写経 3：00～ 読経 3：30 解散	

※参加ご希望の方は準備の都合上、ご連絡下さい。当日でも結構です。

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙なども一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

講座

「論語」からのお話

講師：東郷 敏先生

平成 29年	※1月15日（日）	7月9日（日）	毎月第2日曜日 午後2時半～3時半
	2月12日（日）	8月はお休み	
	3月12日（日）	9月10日（日）	
	4月9日（日）	※10月9日（月）	
	5月14日（日）	11月12日（日）	
	6月11日（日）	12月10日（日）	

※1月は第3日曜開催です。

※10月は月曜開催です。

参加費は無料です。聴講ご希望の方はご連絡下さい。



書道教室

毎月第1・第3土曜日 午後1時～3時

【会費無料】(お手本代 ¥480 /月)

指導：吉田翠華先生

※参加ご希望の方は、ご連絡ください。



ご詠歌教室

梅花流詠讃歌を住職とともに学びませんか？

平成29年より新しく講習会を開催致します。

現在、下記の予定まで確定しております。

第3回目以降は講師老師の予定と参加者の人数によって調整致します。

皆さま奮ってのご参加お待ちしております。

一緒に声を出してお唱えしましょう。

第1回 1月27日(金) 午前10時～12時迄

第2回 2月15日(水) 午後2時～4時迄

講師 梅花流特派師範 渡邊清徳老師(栃木県高德寺副住職)

参加・体験ご希望の方は1週間前迄にご連絡下さい。

梅花流詠讃歌とは、お釈迦さまや祖師方を讃え、ご先祖さまを敬う
こころを旋律にのせてお唱えをするものです。その旋律はやさしく
穏やかな曲調で、唱えやすく安らかなこころが生まれ新たな感動が
わいてきます。

華道教室

毎月第1・第4火曜日 午後2時～3時

【参加費無料】お花代として、毎回 ¥1,000 ご準備ください。

指導：本多輝隆 先生

フラワーデコレーター協会本部講師

池坊正教授一級師範

華道教室「花塾」(港南区丸山台)



※参加ご希望の方は、一週間前までにご連絡ください。



お申し込み・お問い合わせ先

善光寺 横浜市港南区日野中央一十二一十九

(〒113-0052)

電話：〇四五―八四五―二三七一

FAX：〇四五―八四六―二〇〇〇

Eメール：info@zenkouji.net

URL：http://zenkouji.net

やすらぎ寺子屋

～ほとけに親しむ～

やすらぎの郷霊園では、毎月一回週末に「やすらぎ寺子屋」を開催しています。

お釈迦さまや祖師方のお言葉に触れ、共に学びあい、仏の教えを日常に取り入れて心やすらかな日々を過ごす。そのきっかけになればと始めたものです。約一時間の内、前半は椅子座禅、後半は法話。その後、茶話会となります。お気軽にお問い合わせ下さい。

毎月第一日曜日 午後2時～3時

場所：横浜やすらぎの郷霊園管理事務所二階

横浜市旭区上川井町1749-1

電話045-924-0210 FAX045-924-0239

Eメール info@y-yasuraginosato.jp

URL y-yasuraginosato.jp

参加費は無料です。

詳しい日程は上記霊園管理事務所へお問い合わせください。



五世紀菩薩像
中國敦煌三窟窟

三窟
三窟
三窟

ドイツ普門寺・中川正壽老師より
善光二世中興大圓武志老師十三回忌に
因みお便りを頂戴しました。

大寂定中の善光二世中興大圓武志老師にご報告申し上げます。

平成二十八年(二〇一六年)に禅センター「愛禅佛府」大悲正法山興聖普門寺は創立二十周年を祝うことができました。

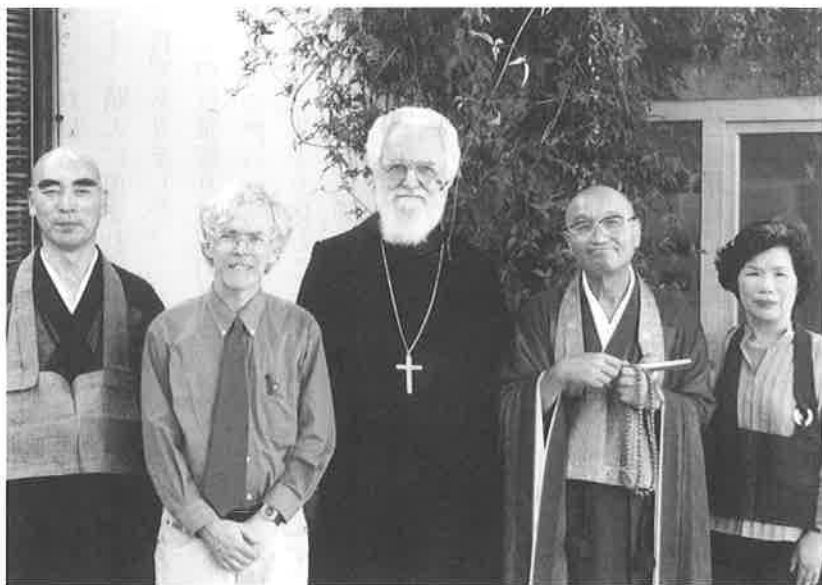
当日の午前には本尊上供、開山献供、サンガのための先亡諸靈諷経を勤め、終わって開山塔、開基塔、万霊塔等三基の開眼供養をいたしました。

午後からは恒例の紅葉祭りとして、日本から邦楽演奏家十人の方々の無報酬での演奏と舞踊をもって、三百人以上の訪問者に日本文化の精

華の一端を堪能していただきました。

当地エルルバッハ市市長は、「正直なところ仏教などまるで知らない土地柄、当初は大変危惧したが、中川老師はカトリックの祝祭にもまた教会墓地の葬式にも参列した。すでにセンターとは仲良くなっており、今ではこの禅センターを通して小さなエルルバッハ市が全国に知られて幸運なことだと思っている」と話され、最後に禅センターの発展を祈ると結ばれました。

次は曹洞宗宗務総長の祝辞が曹洞宗欧州総監によつて代読され、それはすぐにドイツ語でも読み上げられました。「今日の中川正壽堂頭が一九七九年の渡独以来の様々な困難を乗り越えて道心に燃えて誓願を忘れず、一九九六年に禅センター普門寺を設立、二〇〇六年晋山結制、僧堂開単を行い、一貫して毎年様々な教化活動が展開され、参禅者支援者の浄行と献身的な協力により今日の普門寺を築かれた」と敬意と感



2002年先代住職（右より二人目）ドイツ訪問時（左端 中川老師）

謝を述べられたものでした。

このあとは二〇一三年にも公演に来ていただいた邦楽グループの演奏です。

前回はドイツとオーストリアの国境トラウンシュタイン市にある旧教会のホールにて演奏していただいて、二百五十人を越える聴衆を堪能させていただきました。このたびも同じメンバーで尺八は横山鈴琥先生、長唄三味線は杵屋五三魅先生のほかにそれぞれの門弟方のほかにも琴、踊りと総勢十人にて邦楽や歌舞伎の世界をご披露いただきました。舞台はテーブルを使つての臨時ごしらえ、客席は本堂をはみ出して芝生の上にビヤガーデンの椅子を並べました。全体に大好評でありました。公演後はコーヒー、お茶、ケーキが出て、館内でも、また木陰でもそれぞれに話に花が咲きました。思い思いに池あり菜園ありの一万五千平方メートルの境内を散歩する人たち、二億年前の木が石になった坐

禪石で代わる代わる腰をかける人たちがいました。これはスマトラからドイツに運ばれたものです。晴天に恵まれさわやかなそして和やかな一日でありました。

この紅葉祭りは桜のころの春祭りと同じくセンターの門戸開放の日としており、設立時の一九九六年より休むことなく続けております。

それは武志老師からもご助言いただきましたように、異国異教の国にあつてはなくてはならない交流と信頼の機会であります。

さてドイツ普門寺創立二十周年ではありますが、全体を鳥瞰いたしますと、伽藍と境内の整備、サンガメンバーの育成と団結、若い世代への働きかけ、禪センター普門寺の経営と人事、冬の撰心と祖録参究の自利行、一年を通じての様々なコースを提供する利他の献身行、また撰心を中心とする坐禅の行と提唱やスタディーコ

ースの解の中道のバランスなど三次元四次元的に複合し合つて発展してゆかねばなりません。

これを思うとき直ちに生前の武志老師に参じてあれこれとご指示ご教訓を仰ぎたい気持ちでいっぱいになります。しかしながら根本は万古不易であります。それは道心を発し、参師聞法工夫坐禅、身心を脱落し迷悟を放下し、自利利他の菩薩行に邁進することにあります。

老師はよくおっしゃいました。「宗祖を通じて釈尊に帰る」と。私はある時申しました。「その釈尊も越えてしまう」と。その時は舌足らずで私はそれ以上云えませんでした。老師はそれでは無茶苦茶になると眉を寄せられました。

武志老師、あれからドイツに帰つてまもなく言葉が出ました。「宗祖を通じて釈尊に帰る。釈尊を通じて自己に帰る」と。まことにこれにより仏教である必要もなく、まして曹洞宗である必要ありません。しかしながらまさにこれ



2006年普門寺十周年、普山式に随喜

が仏祖に立ち返り、仏祖の教えに沿うものであるがゆえに、いよいよ宗祖道元禅師は尊く、教祖釈迦牟尼仏は尊くおわし帰依帰順するものがあります。

「人間であるがゆえに坐禅する」。ドイツに来る前からそれを予感し、また信じておりましたが、ドイツに来ることができたお陰で、無条件にそれにおつかり、かつそれが自分の骨肉となりました。

しかしながら世知弁總とは程遠く世間音痴の塊のようなこの私を、老師は可愛がってください、過分の接待に預かりました過分にご慈慮をいただいて参りました。

ご懇意にしていたからまもなくの時、お寺というものはご開山というものが必要だかどうかするつもりだねとお尋ねになりました。私は先師の酒井得元老師が当然であると思っておりました。しかし武志老師はおっしゃいました。

それはもつともなことである。しかし海外に出たからには日本の中の師匠筋というのではなく、日本曹洞宗を代表する方に開山になっていただくのがよいのではないかと。

思ってもみないお言葉でしたが深く納得いたしました。同意するのならば心配は要らない、納が手はずを整えるとのことでお言葉で、その先はなにもお尋ねすることもなく、そしてほどなく大本山永平寺七十八世宮崎奕保禪師が普門寺御開山になっていただく允許が下りたのであります。後日人づてに伺ったところでは、武志老師は總持寺系と目されており、また宗門きつてのワンマン実力派であるところから、本山にあっては大歓迎というわけでもなかったと聞き及びました。

武志老師はこの私を見込んでくださいました。私の経歴はいつでもどこかで角を立て要らぬことを云い要らぬことをしてきたという、ひと

えに修行未熟人格未発達のお粗末ものであり続けました。

それゆえになおのこと私にとっては武志老師のご慈慮は身にしみてありがたいことでありました。

最後に老師に申し上げます。

宗祖を通じて釈尊に帰り、釈尊を通じて自己に帰る。この自己とは全世界にほかならず、生きとし生けるものすべてが全世界全自己であると承知して、志を新たにして普門寺の有縁無縁の方々とともに大慈大悲の誓願行を貫くべく仏神に加護を祈るものであります。今日の世界は一年が二十年三十年に当たる速さで動いているように思われます。その中であつてドイツ・ヨーロッパの大地に根を張る普門寺は上述の使命を果たすべく努めてまいります。何卒引き続きご指導ご鞭撻のほど心よりお願い申し上げます。

とはいえ恐れながらも私は世寿において老師

を越えてしまいました。このたびの十三回忌になる年月を思いますと、いまなお日本に帰れば善光寺に参つて老師にお目通り出来て、あれこれとじかにご報告できるような気持ちが強くと、老師のご不在が信じられない思いでおります。

しかし一端打坐に入れば時空なく、釈尊にお目にかかり、道元禪師にお目にかかり、幾多の祖師にお目にかかつて、もちろん武志老師にもお目にかかれます。

生前のご慈慮ご法愛まことにありがとうございます。ありがとうございました。

小子正壽、与えられた使命と寿命をもつて報恩の一事に努めてまいります。

何卒よろしくお願い申しあげます。

合掌

二〇一六年九月吉日

普門寺小住 中川 正壽九拜



先般は先代武志方丈様の十三回忌をまことに威儀ふさわしく無事円成されましたことに感服しかつ心よりお慶び申し上げます。またすばらしい位置に涅槃の塔を建立なされこれもまた御遺志の実現であると再び感服いたしました。

たくさんの方々のご焼香がなによりも先代様のご人徳とご偉業を物語り、かつそれが引き継がれて寺運の栄えを営まれている御日常を感得いたしました。

本来早くに御霊前にご報告すべきところようやくこのたびの機会を頂戴いたしました。ありがとうございます。

この上はご法体の堅固安穩をお祈りしました善光寺様ご一統のさらなるご発展を祈念申し上げます。

先般帰国の折には、ドイツ普門寺創立二十周

年にあたり、祝賀、寄付金を賜り有難く存じました。

皆様方の物心両面にわたる長年のご支援を糧にこの二十周年を迎えることが出来ました。心より厚く御礼申し上げます。

とはいえ坐禅道場としての普門寺はいよいよこれから本格的に機能してゆかねばならないと決意を新たにしております。

合掌

平成二十八年十一月十一日

ドイツ大悲山普門寺 中川 正壽九拜



☆著書の寄贈を賜りました☆

留学僧育英会育英生より著書をお贈り戴きま
した。

◇第一回育英生 田中智誠様

『黄檗山の十二ヶ月

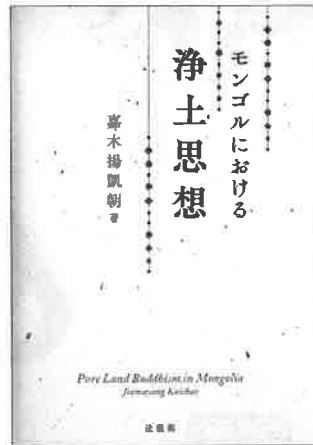
——萬福寺の年中行事と

日次御供、その節令と節食——』



◇第十回育英生 嘉木揚凱朝様

『モンゴルにおける浄土思想』



☆育英生からのお便り☆

博志老師

善光寺の皆様

おかげさまで伯林安居も六年目となりました。欧州での禅のご縁も広がり皆様にはただただ感謝するばかりです。

本年福井県天龍寺の笹川浩仙老師の下伝法の運びとなり、昨日本山、本日祖山拝登致します。典座和尚様よりおすそわけ頂いた本山の沢庵とベルリンで人気の身体に好いのだあめを御笑味下されば幸いです。

何も報恩叶わず恐縮するばかりですが、引き続き御指導御鞭撻の程どうぞよろしくお願い致します。

祈諸縁吉祥福壽無量

平成二十八年十一月一日 樋口 星覚






読者のために

頁をめくるについで

大乘寺山主 東隆眞老師
石川県

拝啓 『成寿』 第四十五巻
拝受いたしました。頁をめく
るごとに先代老師の教えと声
が聞こえてまいります。

育英会のこと継続していた
だいてすばらしいありがたい
ことです。拙僧が推薦したア
ーダは金沢大学で医学博士
の学位号を取得し、同大の専
任教員となりました。めずら
しいことです。ありがたいこ
とです。

献本・御恵贈に感謝

迦葉山龍華院 羽仁素道老師
群馬県

御尊家益々ご隆昌にてご多
用の毎日お過ごしの御事と拝
察申し上げます。

今般は大変結構な『成寿』
献本・御恵贈賜りご芳情衷心
よりお礼申し上げます。
時節柄くれぐれもお体ご慈
愛下されご活躍お祈り申し上
げます。
いつもお心掛け頂きお礼申
し上げます。

敬具

教学の糧にします

清水寺貫主 森清範様
京都市

平素は当山に対し格別のご懇情を頂き 尚その上此度『成寿』第四十五巻を御恵贈下され誠に有難うございます 当山の貴重な蔵書として納め、教学の糧とさせて頂きたく寸書をもって御礼申し上げます 合掌



内容に感銘を

宮本延雄先生
神奈川県

謹啓 時下年の瀬 御山内御一統様ご多忙のことと存じます。 このたび『成寿』を御恵贈賜りまして有難く感謝申し上げます。内容に感銘を受けました。先代の大圓武志大方丈もおよろこびと存じます。 合掌

「仏身充滿於法界」

蓮光寺住職 今泉源由老師
埼玉県

拝啓 『成寿』四十五巻をご恵送下さりありがとうございます。 善光寺様の行持に、仏身充滿於法界、現成のお姿を感じ、黒田武志老師の可々大笑が聞こえてきそうです。 真にありがとうございます。 再拝

写真と文で生き生きと

神奈川県
佐々木宏幹様

謹啓 年末の慌ただしいときとなりました。本日『成寿』第四十五巻を拝受いたしました。巻を重ねるごとに内容が充実してきている観があり、編集の御苦労が伝わって参ります。本号には先代御老師のお元氣なお姿、現董方丈様のお活動の様子が写真と文で生き生きと示されており、感銘を受けました。

博志様ほか御寺族の皆様のお健康と善光寺様の益々の御

発展を心より御祈念申し上げます。何卒佳き年をお迎え下さいますように

合掌

本山での修行の思い出を
振り返っています

静岡県
少林寺住職 井上貫道老師

拝復 此度は『成寿』第四十五号をお送り下さり故武志老師との本山当時の思い出を振り返っております。

山内の修行時の様子も手にとるように伝わって来ます。益々のご活躍を祈念申し上げます。御礼とさせていただきます。

合掌

僧俗一体となって、
先代さまの理念を

長野県
石黒玄章師

冠省『成寿』四十五号拝受致しました。いつもお心掛けたいただき感謝しております。今号も充実した内容で善光寺様が僧俗一体となって、先代さまの理念を博志住職はじめ皆で現わしておられる様子が紙面から伝わります。

どうぞ御慈愛されながら益々の寺門興隆をご祈念いたします。

第二子誕生おめでとうございます。父としても互いに励

んで行きましたよ。

頓首

昨年十月、スリランカに
小学校を開校

真清浄寺 吉田日光様
東京都

冠省 南無妙法蓮華經

故黒田方丈の生きざまを手
本にして自分なりに精進した
結果、インドに別院と小学校
を開校して、平成二十七年十
月にはスリランカに小学校
(いづれもボランティア)が
できました。善光寺さまには
心から感謝申し上げます。

前号に

「お袈裟のご縁」を寄稿

鈴木裕美様
東京都

師走も後数日となりまし
た。お忙しい日々と存じまし
す。本年はいろいろとありがと
うございました。

又、この度は『成寿』冬号
お送りいただき誠にありがと
うございます。私の拙文お恥
ずかしいかぎりです。申し訳
ありません。先回の号もお送
りいただきまして十一月の福
田会で横山さんにお渡しいた
しました。すぐにお礼も申し
上げず、失礼いたしました。

とても喜んでいただきました。

寒さの折、くれぐれもお大
事に良きお年をお迎え下さい
ませ。これからもよろしくお
願い申し上げます。

ありがとうございます。

世界仏教交流センター

発願に感銘

早田(磯村) 啓子様
東京都

前略 『成寿』四十五巻拝
受しました。ありがとうございます
いました。

先代方丈様が世界仏教交流
センターを興したいと発願し
ていらつしやったこと、本誌
で知りました。すばらしいこ

とです。

どうぞ、皆様よいお年をお迎えてくださいませ。

『成寿』を世を送る手順に

千葉県
岩崎 博様
岩崎道枝様

寝耳に水と申しますが、今年も不意の出来事に驚きあわてた一年でございました。

一昨日は貴重な運勢暦等をご送付いただき誠にありがとうございました。来年もこれらを手順にさせていただきます世を送る手順でおります。

年々歳々花相似たり歳々年々人同じからずと申しま

す。私ごとき凡人には同じ道を辿るほかありません。ご指導のほどをお願いして筆を止めます。

表紙の伊藤三喜庵先生の
仏画に時を忘れて

千葉県
藤田正子様

本年も又、うれしいプレゼントが届きました。『成寿』第四十五巻です。

表紙の絵はやはり師であった伊藤三喜庵先生の美しい「仏画」です。

いつ見ても独特で、ユニークな作品にしばし時を忘れま

御本の内容は年々豊かで頁数も多くなっているような気がいたしております。ますますの善光寺様の御発展にはつくづく感心させられます。御母堂様はいつも変わらずお若く御元気の御様子、皆様のますますの御幸福を心より御祈り申し上げます、私も更になんばろうと感じております。

今後とも拝読を望みます

千葉県
原 國臣様

拝啓 盛夏の候、ますますご隆盛のことと大慶に存じます。

この度は季刊誌『成寿』の送付に快く応じていただき大変感謝しております。

我が家も曹洞宗で善光寺様にはお世話になっております。いずれ横浜にも居宅を構える予定ですので、今後共『成寿』を拝読させていただきますのですが、もしお手数でなければ発刊の際には送付して頂けたら大変感謝致します。今後共宜しくお願いいたします。



敬具

不動明王のご慈悲で
頭痛が

神奈川県
石黒通浩様

冠省 五月二十八日の例祭後のお忙しい中を初めて参拝させて頂いたにも拘わらず丁寧なる応対を頂き衷心より御礼申し上げます。

暦で知ってより四年目にして「不動明王」様から声がかかったのではと思っております。

又、おおげさかも知れませんが「冥応」を賜った気がいたします。と申しますのは参拝当日迄の約二ヶ月ほど、

朝・昼・夕と目覚める度に頭痛があり、このまま目が覚めねばと思ったこともしばしばありました。

ところが参拝した当日、帰宅して疲れで一眠りした後、いつもの頭痛がありません。アッ！「不動明王のご慈悲」と確信致しました。以後六月三日二十三時四十分までありません。

浜不動の

例祭に賜う冥応ぞ

誠にありがたく思っております。

合掌

早いうちに御礼参りをさせて頂きたいと思っております。

本当にありがとうございますました。

不尽

善光寺様を

我が家のお寺と

神奈川県
中澤信子様

前略 『成寿』第四十五巻
お届けいただきありがとうございます。
さっそく全体を通
読させていただきました。

前ご住職のあとをつがれし
っかりと法話されているご様
子、ホッといたしました。檀
家ではございませんが、故義
母・父の引導をいただいた善
光寺様を我が家のお寺と考

え、昨年には長女の葬儀もお
願いをいたしております。つ
きましては、巻頭言あたりに
新住職のお写真を掲載いた
けると世代交代のお姿が伝わ
ると思います。ペンをとりました。
今後ともお世話になります。

かしこ

方丈様はじめ、皆様方
の
お心遣いに感謝

神奈川県
鈴木一昭様

前略 日ましに暖かさを覚
え、春めてまいりました。
この度は思いがけなく箱根温
泉への御招待の栄をいただき
ましてありがとうございます

た。早速に、二月二十七、
二十八日に、二男の運転で行
つてまいりました。

その日は、朝から春らしい
暖かいすばらしいお天気にお
まれ若々しい緑の山々は美し
く宿泊いたしました箱根パー
クス吉野では、気づかいのあ
る美味しいお料理のおもてな
しをいただき、温泉には三回
も入るやら、日頃の慌ただし
さを忘れて久しぶりにゆった
りした時間を過ごすことがで
きました。

これもすべて方丈様はじ
め、皆様方のお心遣いの賜と
感謝申し上げます。

末筆ながら善光寺様の益々

のご発展をお祈り申し上げ、
お礼の言葉とさせていただきます。
ます。

先代様の足のマッサージ
をしたぬくもりを今でも

神奈川県
谷口なか様

方丈様 倫子奥様

本日『成寿』が届き拝見さ
せて頂きました。皆様の御様
子がわかり、うれしい限りで
す。私は何のお手伝いも出来
ず、すごく申し訳なく想って
おります。

旅行の思い出だけ大事に
今でも「スリランカ」の旅行
の帰りに待ち合いの所で先代

様の足のマッサージをしたぬ
くもりを今でも感じておりま
す。

写真掲載、感謝です

神奈川県
飯塚征子様

前略 いつも大変お世話に

なっております。この度『成
寿』冬季号その他をお送り頂
きましてありがとうございます
した。又、『成寿』四十五号
十九頁に掲載して頂いた写真
は私です。隣の方は旭区の沼
倉みのる様です。五頁の左三
段目も私です。後方は沼倉様

で二段目のアイボリーの洋服
をお召しの方は高橋様で、こ
の方はやすらぎの郷の寺子屋
で御一緒させていただいてお
ります。

大勢の参拝者の中から掲載
していただき誠にありがとうございます
ございました。厚く御礼申し
上げます。

早々

一生この眼に
しかと焼き付けて

神奈川県
玉那覇 明様

いつも大変お世話様になり
ます。本年も宜しくお願い致
します。

大本山總持寺大遠忌法要、

先代大圓武志大和尚、檀信徒各家先祖代々のご供養の法要に参座させて頂きましたこと、御本尊様の御前にていなませて頂きましたこと、一生この眼にしかと焼き付けさせて頂きました。この機会を頂戴しましたこと感謝に堪えません。

寒くなってきました。お身体に気をつけて下さいませ。節分会にてお会い出来ますこと楽しみにしております。

合掌

来年の節分は84歳、年男

神奈川県
松本道男様

拝啓 先日の節分法要の際は
は大変お世話になりました。

来年は私も八十四歳の年男で、生きていけば（現在高血圧・糖尿病・高脂血症・腰痛を病んでおり、殆ど寝ております。また、最近視力も落ちて大きな活字きり読めません）節分に来年もお世話になります。今から十一年前、今は亡き先代の大圓武志和尚さんに言われて年男として縁台に立って豆をまいた記憶が

蘇ってきました。考えてみれば毎年節分法要に参加してきた訳で感慨無量なものがあります。数年前、ちゃんこをご馳走になり、相撲の魁聖関と記念写真を撮りました。今年はカメラを持参するのを忘れしました。

別紙の通り、節分法要の下手な俳句を詠みましたのでご覧下さい。

尚、今から数年前、私の所属する結社の主宰から人間八十歳を過ぎると自分の句も纏められなくなるので今のうちに纏めておくようにと示唆され、高校時代から現在に至る六十年間の俳句約千句の中

から、三百句ほどに絞り句集『桜鯛』を百部上梓しました。当時お送りしましたが、ご覧いただけただでしょうか。

八十二歳（昨年）の春、体調を崩して入院もしましたが、元気なうちは頑張りますので、今後とも宜しく願います。

合掌

節分法要

（成寿山横浜善光寺にて）

- ・ 節分会鉦と太鼓の響き合ふ
- ・ 節分会坊さんに和しお経読む
- ・ 節分に鬼より豆を貰いけり
- ・ 一升枥に達磨の並ぶ節分会
- ・ 文化財の獅子節分を狂ひ舞ふ

- ・ 舞ひ獅子に頭を噛まれ節分会
- ・ 節分に蝶々結び解きたり
- ・ 暗き闇引き裂くごとく

豆を撒く

- ・ 節分やおかめ躍れば

ひよっこも

- ・ 節分会解脱の豆を拾ひけり

（陸田同人・現代俳句協会会員）

さすが大和尚様のご子息

神奈川県

佐伯淳子様

今年は大先代住職大圓武志大和尚様の十三回忌との事、お元気でした頃の大和尚様のお姿を偲び、想い改めて心からご冥福をお祈り申し上げます。

大和尚様は、とても人徳にみちた慈愛深く、どなたからも敬愛されるお方でした。

いつも檀家の皆々様に数多くの尊い道徳心をお導き下さり、支え、接して下さっていたお姿を想い出して居ります。

その後、ご子息であります現住職様が引き継がれ、お父上様の心願をしつかり立派に引き継がれて居られるお姿にいつも、さすが大和尚様のご子息と感心、敬服しております。私達檀家もご住職並びに職員の皆々様と心を共にしてこれからもずっとお寺を守って参りたいと心して居るところでございます。どうか大和

尚様も善光寺を見守って下さるよう祈念致しております。

私事ですみませんが、今年

は私共の夫の二十三回忌でございます。夫亡き当時は大和尚様に大変暖かく接して頂き、その度は大変お世話になりました事、改めて想い起こしています。当時私共には事情あつて長いことお寺の納骨堂にお預けし、お世話になりました関係もあり、毎月夫の命日は一日もかかさずお寺参りをさせて頂きました折、いつも暖かくお声をかけて頂き、慰めや励ましの言葉の数々を頂き嬉しかったことな

ど、嬉しく今も忘れず感謝の気持ちで一杯でございます。

本当に本当にありがとうございますございました。

本日十三回忌にあたり改めて大和尚様の在りし日のお姿を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

本当にダイナミックな方

富山県
浅香 恵様

前略 『成寿』第四十五巻
ありがとうございます。

実里様御誕生おめでとうござ
います。亡き武志大和尚様
も天国でお喜びのことと存じ

ます。

アーカイブス「二十一世紀の使命」をなつかしく読ませていただきました。本当にダイナミックな方でした。尊敬しております。

私のほうは乳がんの再発もなく、無事に日々をすごさせていただき感謝しています。善光寺様の益々の御活躍、御発展をお祈り申し上げます。

御健康と御活躍を

お祈り申し上げます

早川祥賢様

冠省 『成寿』最新号を有

難く拝受しました。厚く御礼
申し上げます。

御住職様はじめ皆様の一層
の御健康と御活躍をお祈り申
し上げます。

目からうるこの
事ばかり

矢部紘子様

お正月の御札を送って頂き
ありがとうございます。一年
間大切にいたします。今回も
ハハの都合により欠席させて
いただきます。とても残念で
す。又、年末御送り頂きまし
た『成寿』にも、内容にとて
も感銘を受けました。目から

うるこの事ばかりでした。仕
事をしている時の肩に力が入
っていた自分がなさけなくな
ります。物事を正面から素直
にとらえて見る事が大切な事
と改めて感じました。
切手は必要な時にどうぞ御
使用下さい。

生き方のお手本

植芝弘子様

暖かくおだやかなお正月で
ございましたが寒さも半ばと
なりましてお寒さ厳しい日が
続きます。

和尚様はじめ皆様お変わり

なくおすごしでございます
か。昨年はいへんお世話様
になりました。送って下さい
ました『成寿』の各記事が生
き方のお手本となり励ましと
なりまして、たいへん有難く
存じております。

どうぞ本年もよろしくご指
導をお願い申し上げます。

節分会は欠席させて頂きま
すが、お札の申込みをさせて頂
きます。申込みのはがきを
同封いたしますのでよろしく
お願い致します。お寒さ厳し
い折柄どうぞお体を大切にお
すごし下さいませ。かしこ

御活動の背景に

武志方丈様の壮大な思想

東京都

お名前なし

『成寿』御礼申し上げます。
故武志方丈様の「二十一世紀の使命」を拝読致しました。
エネルギー感でリズム感のある文章を読むにつけ善光寺様の御活動の背景には武志方丈様の壮大な思想と信念が息づいていたと改めて思い知りました。

長泉寺水庭御住職の御法話は何事も飾らずに御自身の思いと御経験をそのまま素直に語っておられ感銘を受けまし

た。すなおな気持ちで私の行く末の一灯と想いました。
皆々様の御活躍をお祈り致します。

西谷
東京都
榮様

前略 師走の日も幾日もな
く早、今年も終わりになろう
としておりますが、御寺様ご
一同方々様にはお変わりござ
いませんでしょうか。誠にお
そくなりましたが。



《絵手紙》

越石哲永様

善光寺留学僧育英会第三期
生です。

脳梗塞を患うも善光寺講座
「論語からのお話」に出席さ
れるなど心身のリハビリに努
め、毎月、心のこもった絵手
紙を送って下さいます。



初夏、日ノ出屋石材店様より釈迦殿玄関に蓮を
頂きました。お盆頃、見事に花を咲かせました。



編集後記

▼成寿四十六号お届け致します。

今号は二世中興大圓武志大和尚十三回忌法要を特集致しました。焼香師をお務め頂いた大乘寺山主東隆眞老師、正翁寺眞素明老師には、温かい御法語御挨拶を賜り厚く御礼申し上げます。在りし日の先代様が目に浮かび、感激致しました。また公私共御多用にも関わらず御随喜頂いた御寺院様、来賓の皆様、総代の皆様方、親戚縁者の皆様、準備にあたり色々とお手伝い頂いた山内の皆様にご心より感謝申し上げます。

▼また(株)板橋の皆様には客殿の準備などご尽力を賜りました。ありがとうございます。

▼春、京都清水寺への参拝。森清範殿下より心に響くご法話を賜りました。また道標『善光寺参道』の文字をご揮毫頂きました。ありがとうございます。

▼秋彼岸には先代十三回忌予修法要を成願寺山口晴通老師にお務め頂き厳修致しました。六百名を越す檀信徒の皆様と一緒に読経。ありがとうございます。

▼今年先代様が未だ善光寺に居ますが如くにその存在感をあらためて感じた年となりました。檀信徒の皆さまはじめ多くのご縁に支えられて無事に十三回忌を迎える事が出来、心より深く御礼申し上げます。

▼先代方丈の『おもいやりの心』。平成十六年、翌年予定されていたハーバード大学での講演用に執筆していた原稿です。推敲前の未完原稿ですが熱い思いが伝わってきます。「いま世界は疲れています」冒頭の言葉はまさに現代への予見。人は疲れると自然と俯き背を丸め顔は下を向き、心はどんどん内向きになっていきます。世界各地で起きている民族や宗教の対立もこの思考からでしょうか。顔(面)を上げて(面倒がらずに)心を励まして、「おもいやりの心」を皆さまと共に広げていけたらと願います。

▼節分会。(株)板橋様に舞台を設置して頂き「祈禱と奉納演芸。幫間(ほうかん)芸の悠玄亭玉八師匠。巧みな話芸に笑ったり感心したりしているうちにアツという間に時間が経ちました。面白かったです。川島囃子保存会による獅子舞。笛と太鼓のリズムに大迫力の獅子舞でした。

▼最近テレビでも「マインドフルネス」という言葉が注目されています。(NHK「ガッテン」、日本テレビ系列「世界一受けたい授業」など)ストレス軽減・認知症予防に効果がある瞑想法として紹介されています。坐禅とマインドフルネスの関係は？興味をもたれた方は是非坐禅会にお越し下さい。

▼坐禅会その他、写経会、書道・華道教室、論語講座、梅花教室、やすらぎ寺子屋など様々な行持を行い皆さまをお待ちしております。

▼来年一月九日は新年祈禱会です。皆様のご参詣心よりお待ちしております。

成寿 第四十六巻

平成二十八年十二月十日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目

十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 (株)中外日報社





横濱善光寺